

いろは歌義臣整

いろは歌義臣整

座 本 豊 竹 越 前 少 掾

梓弓伊豆の高根の牧狩に。貝鉦太鼓亂調子。列卒を揃へて狩立る。相模國の住人横山郡司信久管領の仰を請。土肥の牧場を狩裝束。平場に幕打床几を立させ。家の子山形兵衛を従へ。列卒の人数に下知をなし。調自餘の駒には目な掛ぞ。望む馬は鹿毛の駒。行馬を越な谷へ下すな。尾上の廣見へ狩出せと。地追々に入歩を走らせ。眼を配つて控ゆる折柄。調當國の領主結城六郎持朝の家臣。土川言藏行國參上と披露させ。フシ禮義正しく歩來る。地使者の口上待間もなく。横山郡司詞を掛。領主よりの使と有ば。定めて案内届もなく。我儘不作法など云。一本刺使の口上聞迄なし。此狩鞍は信久が私と思ふか。管領左金吾政公。今度勅使下向に付。和主が主の六郎持朝。常陸の城主小栗判官兼氏。兩人へ申付た御馳走役。此土肥の牧には。拔群の鹿毛の駒。田畑を荒し。人秣を食事聞及ばれ。急ぎ狩出し乗入て。曲馬曲乘を御覽に入よ。御下向も明々後日。結城迎も饗の役。此方から申さず共。疾よりも出向ふ筈。使者所て有まいと。權威を見せて信久が。詞に我慢をフシ顯せり。地土川言藏手をつかへ。調仰の如く主人六郎御馳走の役儀蒙つては候へ共。今日の此狩鞍。曾以て存せぬ故。御迎の禮義は元來御來駕と承はらば。列卒の加勢も出すべき筈。何を申すも存せぬ段。地其儀は御免と和かに。邪非道と知ながら態と敬ふ土川が。詞の圖に乘山形兵衛。調左程禮義を存するなら。結城が直に參る筈。家老殿を越れたは。谷に來たに違も有まい。お目高の郡司公。今の世の御出頭。何と一句も有まいかと。地主に劣ぬ人喰馬。フシ相口挨拶不骨なる。地傍に控へて土川が。報を待たる結城六郎。堪兼てずつと出。言藏下れと傍近くどつかと座し。詞ヤア過言なり山形。成程御邊が云如く。一言終め申て

う爲。六郎直に参る所。土川が留めし故暫く控て居た。改め云には及ばね共。當國は我先祖七郎朝光。鎌倉殿より給はつたる領分。一應も再應も届るは武士の禮義。管領の仰なりとて禮を破つて斯せよとは。よも宜ふまじ。殊更隣國と云。式作法故實を正す横山殿。何と左様では有まいかと。遣込られてしかなの兵衛。郡司は猶も挫まぬ顔色。門ヤアあくちも切ぬ結城六郎。馳走の役目を請ながら師範する横山に。咎立は片腹痛し。今一言云て見よ。此座は立さぬサア何と。ヲ、役目は役目禮義は禮義。夫を破るは人外法外。切刀廻して如何お仕やると。地刀の柄に手を掛けて。立寄六郎土川が。中に分入先暫しと。留るは忠節役柄の。後日と思ふ家老職。兵衛も共に反打掛。既に斯よとフシ見へたる所へ。地暫く候と聲を掛。小栗判官兼氏供廻りを麓に残し。大驚傳五召通て。フシ徐々と歩寄。詞御領主の六郎殿申さば今日の亭主方。隣國の好と云。郡司公には御客座。爭論の場へ参り掛りし兼氏。何事も御預下さるべし。殊に某結城殿。響應の役を蒙れば旁以て見捨難く。争を親の端となし。配膳給仕の御師範。宜しう頼奉ると。地威儀十分に兼氏の。直なる道の扱ひに。横紙破りの横山主従。ぐつ共結城六郎を。宥める土川言藏が。フシ胸も落付計なり。地兼氏重て詞を正し。詞承れば當所に於て。牧狩の御催し。能折に参り合見物も仕らん。萬一御手に餘りなば。列卒並の一働き。御遠慮は御無用。ホ、ウ如何にも。饗の用意の牧狩。中々手に入事でない。貴殿も馬藝の家なれば兼留て上臈に入られよ。我等も用意の陰の鞭。たんびも列卒もヤア山形。最前より靜まつたは山深く追込しぞ。消斷をさすな追立よ。地急げく山形兵衛。フシ畏つたと走行。地跡を詠て大驚傳五。土川に打向ひ。詞此度互の主人と主人。響應の御役目。御苦勞と申晴の場所。ヤア夫に付て承る。貴方の息女此方の家老。大岸由良之助の子息力彌へ縁邊の噂も有ば。猶以て入魂の儀。ハア是はく御挨拶。片田舎の不骨育。懇望に預るは娘が仕合。我等が大慶。先達て御主人へ伺ひ申せば。ヲ、如何にも。ナニ小栗公。足下の家は本身故。十人の殿原迎勝れたる家老の内。大岸親子は取分て。武藝は元來遊藝迄。堪能の沙汰聞及び。羨しう存る處。其大岸より彼が娘を所

望^{もち}の由^{よし}。ホウ成程^{なほほど}其儀^ぎは聞^き及^{およ}ぶ。誰^{たれ}有^あふ結城^{けつぎ}殿^{どの}の家柄^{いへがら}は。頼朝^{よりとも}公^{きみ}の御昵近^{ごぢつじん}。身^み不肖^{ふせう}の小栗^{おぐり}が家來^{けけ}。婚姻^{こんいん}を取結^{とりむす}ぶとは。大悅^{だいえつ}に存^{ぞん}ると。地互^{ぢあひ}の挨拶^{あいさつ}家來^{けけ}同士^{どうし}。早^{はや}お暇^{いふ}と言藏^{ごんざう}が。勸^{すす}に六郎^{ろくろう}打諾^{うちだく}き。心^{こころ}に宿意^{しゆくい}有^あながら。熊^{くま}と面^{おもて}を和^{やは}けて。阿兼氏^{あかみし}公^{きみ}には今暫^{いましばし}し。申^{まを}し合^あせは又明日^{またあした}。鎌倉^{かまくら}にて御對面^{ごたいめん}。如何^{いか}にも其時^{そのとき}何角^{なんかく}の儀^ぎ。地然^{ぢぜん}らば是^{こゝ}てお別^{わか}れと。式禮默^{しきれいもく}禮主^{れしゅ}従^{したが}は。フシ館^{かたし}を指^{さし}て立歸^{たちかへ}る。早程^{はやほど}もなく攻太鼓^{うご}。手^てに取^とる如^{ごと}く列卒^{れつそ}の聲^{こゑ}。追立^{おひだて}く狩立^{かしたて}られ。荒^{あわ}に荒鹿毛^{あらかけ}の駒^{こま}。常^{つね}の馬^{うま}とは二^{ふた}かさ勝^{かち}り。骨組^{ほねぐみ}肉合^{にくあひ}簀毛^{すげ}鬘^{まう}。野髮^{のげ}の儘^{まま}に振亂^{ふらん}し。眼^{まなこ}の光^{ひかり}は鬼共^{おにども}蛇共^{へびども}。譬^{たとへ}ん方^{かた}なく人^{ひと}を感^{おど}して。鼻風^{はなふう}。數^{かず}多^たの列卒^{れつそ}を踏立^{ふみだて}蹴立^{けりだて}勿^な散^{さん}し。たんびに掛^かけと山形兵衛^{やまがたへいゑ}。間近^{まぢか}く寄^よば蹴散^{けりさん}され。手鞠^{てまり}の如^{ごと}く轉々^{くるくる}。腰骨^{こしほね}打^うて立兼^{たちか}れば。郡司^{ぐんじ}苛^{いら}て振上^{ふりあ}る。詞^{ことば}さうかうりうかう秘密^{ひみつ}の鞭^{むち}。一當^{ひとあた}あてんと。向^{むか}ふて掛^かれば駈^かへ戻る。地駒^{ぢこま}の蹄^{ひづめ}の高嘶^{たかいき}き。百千^{ひゃくせん}の雷^{いかづち}も。フシ爰^{こゝ}に落來^{おちこ}る如^{ごと}くなり。愁^{なみじ}に逆^{さか}ふて。馬^{うま}の力^{ちから}は百倍^{ひゃくばい}増^ま。爰^{こゝ}に潜^{かづ}り彼處^{かじこ}に立^{たち}。横山郡司^{よこやまぐんじ}が眞額^{まがく}を。したゝか蹴^けられて又轉倒^{またころ}。フシ吁^{えん}々^ん。竊計^{せつけい}なり。隙^{ひま}を覗^{のぞ}ひ判官兼氏^{はんぐわんかんし}。何條^{なんじょう}此馬^{このうま}乘留^{まかりど}んと。的^{のこ}に成^{なり}てぞ待掛^{まちか}たり。地重^{ぢしづ}て響^{ひび}く具鉦^{ぐしん}に。牽制^{けんせい}立^{たち}られ引返^{ひきかへ}し。狂^{くる}ひに狂^{くる}ふを事^{こと}とも爲^なす。馬手^{うまて}に開^{ひら}き弓手^{きゆて}に外^{ほか}し。虚實^{きょじつ}を見澄^{みすみ}しずつと入^いり。撥^はしと平首^{へいしゅ}當^{あた}られて。跳^はる別足^{べつそく}無手^{むて}と握^{にぎ}り。回輪^{わいろん}と返^{かへ}し遺過^{いご}し。尾筒^{おづつ}を握^{にぎ}んで。コリヤ〜。エイ〜と引戻^{ひきもど}し。太腹^{ふたはら}裂^されと撥^はしと蹴^ける。機^{はすみ}に逐進^{しゆくしん}足取^{あしどり}を。見濟^{みさ}し背骨^{せほね}に打跨^{うちまたり}。一締^{ひとめ}しめたる勢^{いきま}ひに。狂^{くる}はん氣色^{きしき}も繋^{つな}げる如^{ごと}く。四足^{しそく}を揃^{そろ}へ嘶^{いき}きに。不首尾^{ふしゆび}の横山主従^{よこやましゅじゆ}が。フシ口^{くち}も判^{あき}て詞^{ことば}なし。地傳五^{ぢでんご}は勇^{いさ}んで用意^{ようい}の轡^{うづ}。手綱^{たづな}に馴^なれたる馬^{うま}の事^{こと}。今日^{けふ}牧出^{ぼくで}しの荒馬^{あうば}も陰陽有^{いんやうあり}。手綱^{たづな}に三箇^{さんか}五箇^{ごか}の鞍^{くら}。七箇^{しちか}の秘事^{ひじ}と云事^{こと}は。人^{ひと}にも馴^なれども。手綱^{たづな}に馴^なれたる馬^{うま}の事^{こと}。今日^{けふ}牧出^{ぼくで}しの荒馬^{あうば}に。りうかうそうがう入^いるべきか。地馬^{ぢうば}は乘^{のり}人の心^{こころ}に有^あ。關羽^{くわんぷ}が赤兔馬^{せくと}。項羽^{きやうぷ}が騅^う。穆王^{もくわう}の八足^{はふそく}も。皆夫々^{みなそれぞれ}の名^なを付^つて。逸物^{いぶつ}の徳^{とく}をなす。詞^{ことば}乗取^{のりとり}たる此馬^{このうま}も。鬼鹿毛^{おしかけ}と名^なを付^つて。小栗^{おぐり}が家^{いえ}の秘藏^{ひざう}にせん。傳五^{でんご}續^つけ乗打^{のりうち}御免^{ごめん}と。左右^{さうりやう}の足撥^{あしは}フシしと當^{あた}れば。回々^{くるくる}輪乘^{りんじやう}。曲馬^{まがうま}のフシの達人^{たつじん}名人^{めいじん}。地其馬返^{ぢきうまかへ}せは聲計^{こゑはかり}。横山郡司^{よこやまぐんじ}が獅嚼^{しはく}頰^{はな}。兵衛^{へいゑ}が手^てを引足^{ひきあし}引^ひや。痛^{いた}さ無念^{むねん}主従^{しゅじゆ}が。互^{たひ}に尋土肥^{じんどひ}の牧^{ぼく}。打連^{うちつれ}てこそ三重^{さんじやう}歸^{かへ}りけり。

二 冊 目

地三千歳と壽く桃の彌生月。茲に足利左金吾源政朝朝臣と申すは。室町殿の御舍弟にて。左鎌倉の管領職。民を撫育し在せば。帝の惠厚して。此度勅使の御下向。響應の規式細かに。馳走備の役人。善盡し美盡して。花麗を飭る大下馬前。數の盛砂等目に。フシ武家の作法を嚴重なる。地出勤の時刻とて。先を拂はせ出来るは。横山郡司信久。故實の家を立烏帽子。素袍の肩肘。ハイ／＼。先を拂はせ濁歩のか。直ては往ぬ裏門通。佞た主に腰を押。山形兵衛が詞イヤ申し勅使の應對は昨日相濟。今日は馳走のお能。始りは卯の上刻。アレ早始つたやら。鼓太鼓が鳴申す。早々御出仕成れぬか。イヤサ／＼急事は些ともない。汝に云付置事あり。彼土肥山の牧狩の時。結城六郎持朝めは。若輩と云。此方より屈ぬが不調法。過言存外は了簡も成べきが。逸物の鬼鹿毛。小栗めに乗取れた無念奇怪さ。如何思ひ直しても。蟲が堪へぬ。幸兩人共響應の役。何て成共不覺を取せ。赤恥負かせて腹糞分別。第一は小栗判官。今日出仕の砌には。彼鬼鹿毛を引せて來つらん。何でも不覺を取せたら。御前に堪ず。這々逃て歸るは必定。其時汝は彼馬を。奪返して立歸れ。急度申渡したぞ。ハ、ア是は上分別。其儀は我等に御任せ。結城めも能次手。過言を吐た意趣散し。鬼鹿毛を奪取たら。人様に喰せうと。地示合する主従が。鼻突合す談合半。地駈來る下部が手をつかへ。調結城六郎が家臣土川言藏行國。横山公へ御訴訟の儀に付。只今はへ參上と。地云捨歸る跡を見て。山形郡司顔と顔。調舌も引ぬに結城が家來。御用を缺する寛意者。構はず共御出仕と。地言は横山肩に鐵。詞言藏は老臣。訴訟と云には子細ぞあらん。待て取せと有る所へ。地下馬で乗物折も能。フシ折目高なる標の。取形しやんと詰袖に。振の扶は彼岸の。力彌に號計されし。地娘の小浪母親の。戸無瀬が先に徐々と。會釋こぼして手を突へ。調是は／＼貴方様。郡司信久様でござりますか。土川言藏が女房娘。憚りも顯す。參りましたはお願ひの筋。マア言付た物はへ

是へと詞の中。地下部が直す白木の臺。親子はすさつて頭を下。詞信久様へ申上ます。此度我々が主人結城六郎へ。
 大役仰付られ下されまする段。身に餘りする仕合。未だ若年の儀。作法迎も覺束なく存じます所。貴方様よりお差圖
 を。遊ばし下さる由。首尾も宜しう相動まするも。信久様の御取成と。六郎を始私共迄。お嬉しう存じまし。
 近比無難な儀でござりますれ共。取敢ずお禮の爲。些少ながらこの一品。お納め遊ばされ下さりませうならば。お使
 に参りました私共が面目。則目錄お取次成され下されと。地山形兵衛が手に渡せば。其儘披て。詞目錄。一つ黄金
 五拾枚并に絹布の代金三拾枚。結城六郎奥方。一つ黄金五拾枚土川言藏。同番頭侍中。献上し奉る。横山郡司信
 久様と。地讀上られて。目と目を見合す横山山形。只大口を割た顔。此方は猶も膝摺寄。詞夫言藏が参り申上るが。
 本意ではござりますれども。年若な六郎。言藏が附添ますれば。自由ながら寸暇もなく。是と申すも御役目を。大切
 に存るから。不屈の儀宜しう申上る様にと。ノウ小浪。アイ左様でござります。大事のお使に上る事じや。其方も付
 て参つて。お断のお願ひを申上よと。申付ましての推参。憚ながら捧物。お請遊ばされ下さりませうなら。お有難う
 存じますと親と子が。地取引付付口上も。水際の立土川が。秘藏娘と知られたり。地郡司俄に輕薄笑ひ。詞ハ、ハ、
 是はく御念の入たる御使。扱々々斟酌申すも何やら無禮。イヤハヤ何の師範致す程の事もないが六郎殿には全體
 器用にござるてや。ナニ兵衛。お志じや請ずば成まい。ソレ皆取納めよ。エ、扱々女性達太儀でござる。信久殊外
 迷惑致すと。申てお呉りやれ。モウ参ると。地詞は曖昧開た口。持掛られて主従が。工面も親子が胸算用。坪へ遣つ
 たと心の笑。詞是はく。御出仕の。お邪魔致しましてござりまする。モウお暇娘おじやと立上れば。ア、是さは
 さ。御能も早始まつた。拜見してござらぬか。ハア、お有難うはござりますれど。御歴々の脇達計り。夫に女子の。
 アア何のく。柳の間は皆女中計。殊に此郡司が同道するに。誰が何と申す物。平にく。ハア左様ではござります
 うが。私計か餘所外知らぬ此娘。若し眞相でも有たらば。言藏が無調法にも。否只お暇下さりませ。ハテ扱々慮は

入ぬになう是非と有ば別れ申。六郎殿儀は身が宜しう。ナウ兵衛。左様共。何れも御太儀。モウ参ると。地打連
 フシ御門に入跡は。地屑で吐息を戸無瀬が嬉しさ。充分と首尾を仕課せた。調夫に早う此様子を。サア。娘と氣を
 急母。地小浪も俱に立上り。調イヤ申し御主人六郎様の相役は。小栗様と聞きました。六郎様には父様がお附。小栗様
 にも御家老。若し由良之助様が御附ならば。彼ナ申と。地跡言殘。フシもぢくすれば諸く母。調ヲ、そりや何方
 へと附まして。サイナア由良之助様がお出ならば。若御子息の力彌様も御一所に。彼子とした事が糺混て何ぞいの。
 シタガ顔が見たい筈。互に懸意な爺御同士。嫁に貰ひたい進ぜふと。固の印は取ね共。一旦の約束なれば。間近に遣
 管の事。今度の御用も首尾したら。此私がせり立て。婚禮の盃を。戴がして遣ましよと。地娘の心波む母の。詞も嬉
 し恥かしの。森の雨露振袖に。おぼく育をフシ顯せり。地下馬から家來が御迎。サア。おじやと親子連。屋敷を指
 てフシ立歸る。地程なく入來る儲の役。結城六郎持朝。跡に附添土川言藏。供廻りを遠ざけて。門前近く差掛り。申
 申と呼留め。調見ますれば殊の外。不興なる御顔持。別して今日は晴の御座。必々御短慮を御鎮め下さるべしと。
 云せも立ず。ヤア又しても又しても。知れた事をしちくどい收狩の其日より遺恨ある其上に横山が。指圖に付此役目
 堪忍するも事に寄。汝も知た日比の短氣。大切の役を勤るからは。堪る丈は忍ても。非道の我意を募る時は。二言と
 言さず眞二つぞサ、。夫が御短慮。重々彼奴は憎けれど。重きは管領の御詞。私の宿意は内證。公業の御役柄。
 容易に非道は申さぬ筈。警差圖を受る連。御逗留の其間首尾能仕廻ば元々の國取。白を立ふと倒さうと。何のお構
 ひ。先夫迄はナ御合點が参りしなと。地戲氣交りに諫る詞。サア宜わい。アレ。囃子の物音早二番目の田村の能。
 彌生半の春の空。風も長閑に廻る日の連て。御門に。へ入にけり。地脇能も早田村の掛り地主權現の花盛。花を飴り
 し式臺を歩む結城六郎持朝。郡司に意趣は晴やらず併此場の時宜に由り。討て捨んず刀の鯉口。奥を窺ふ長袴の裾引
 上て待ぞとも。白髪しらがの郡司兵衛ぐんじへいゑを従へ。調是は。六郎殿にはモウ出仕か。早し。エ、此小栗こくりは未だ登城も。イ

ヤハヤ何ものでござる。其元を待申したは。詮言致さねば叶はぬ儀外でもない。此程の牧狩貴殿の領内へ届もなく。
 踏込だは無骨の至。能々思へば我等が寛恕。其上何角詞を暴し過言申た。嘸お腹が立たてござらう。兎角年罷寄た
 れば性急に成て跡先の辨なく。口へ出る儘申た事さ。其お詮を只今申す眞平。何事も年に免じて御免あられふ。
 コレ長年をして。貴殿に手を下申す。御了簡に預りませふ。コリヤ兵衛も俱にお詫申せ。と。地手の裏返す詮言は。
 黄金一味の利目とは知ぬ六郎拍子拔。思案も一圖柴垣に。忍んで窺ふ土川が。フシ心の悦び限なし。地郡司は奥口見廻
 して。詞コリヤ兵衛。小栗はまだ頼出しせぬか。六郎殿とは大きな相違。お若い奇特。エ、不行儀なは兼氏。
 主が主なら家來まで氣を付る奴がない。ナニ六郎殿。御前へお供申さうお立召れ。コレサ郡司が手を取ふか。ドレ
 ドレ。ハア否々。相役の判官兼氏。待合せてから。先お先へ。ハアテ宜わさ。役目を重んじ早々出仕召れた貴
 殿。夫に引換出て來ぬは我々を踏付上を恐れぬ憎い小栗め構はず共イザ御前へ。兵衛も進めよ。イザ。お供と。地主
 從寄てのたつばいに。然らば左様と打通て。フシ奥へ通れば言藏が。仕濟したりと胸の戸も。フシ開てお次に控へ居
 る。地間も有せず出仕ある小栗判官兼氏。今日を公服の大紋に文武二道を立烏帽子。作法正しく長廊下は是も家來を休
 らはせ。徐々フシ一間に入來れば。地耳を突抜謠の和歌。瞻仰れば伊勢の海。詞ムウ脇能の責なるかと。地見遣
 奥より横山郡司。詞ヤ兼氏今か。扱々々。云付た刻限何時じやと思はる。六郎は早先達て。お能も早二番目追付
 仕廻。献上の刻限遅なはると。立途に立た此郡司。シテ其元の音物持參か。ドレ見やう。ハア結城殿に申合せは已の
 上刻。其旨に候故。跡より家來が持參の筈。ハ、ハ、曰の刻の献上物。卯の刻から持したら何ぞ損でも往事か。時刻
 が過たら夫なりに濟さんと勘定か。片田舎に小城を持た田夫野人。式作法も知まい故。此郡司に差圖せよとの仰
 夫を聞つゝ隙入は上意を背か。某を侮つてか。斯云中にも何故出さぬと。地色を違へてフシ罵れば。地牧場の遺恨を
 持て出る。雜言過言に判官兼氏。無念を押へ御座る所へ。つかく出る山形兵衛。詞結城殿の御音物其外揃ひ候へ

ば。急御前へ御披露。地然るべしと云捨て。駈入山形續いて立。郡司が裾を引留め。調同役を蒙る兼氏。遅速有ては御前の首尾。地今暫くと云せも敢ず。調其方の首尾が悪いとて。此横山何共ない。緩慢と待中に遅なはつて無念に成。拙者が越度に成事は罷成ぬ。コレ兼氏。マア何と心得てぞ。勅使への献上は皆管領への御奉公。面々の奉公を何の人に問合せ。忠義手柄は武士の仕勝。元油断から起る事。何と左様じや有まいかと。地嘲弄せられ胸先へ短氣の蟲の迫詰く。討て捨んと思へ共所と云折と云。無念を押へ堪ても。怒は面に顯はれて血筋。血走る其折から。原郷右衛門定時白木の臺に堆く。巻絹取々兩手に捧げ。フシ御目通りに直し置。地ヤア遅かりしと急たる顔色。郷右衛門平伏し。調御献上は已の上刻。未だ五つには成か成ず。御心靜かに御披露と。地云も切せず性早の郡司。調ヤア何と云已の刻に成ずば上ぬ作法か。時分が早くば持て立。ハ、否々左様では。コリヤ郷右衛門推參な。何を汝が罷立く。地ハ、激と斗に主人の色目。フシ心殘して出て行。地兼氏心を押鎮め。調遲參の義は横山公。宜しう取成下さるべしと。慇懃に手を突て。地指寄る臺熟々見て。調ハ、ハ、ハ、時外の此進物。コリヤ何じや。堺純子の比翼縞。片形くの織物。是が御前へ出さるゝ物か。仕替て來せいと突戻す。地拍子に臺の足襪たり。外れて落るは絹諸共。埒り兼たる判官兼氏。調心を盡せし献上物。非を討計か此如く。手を掛けて碎かれしは。所存ばし有ての事か。ヲ、サ悉皆所存がないでもない。牧場の遺恨を忘れたか。コハ存寄ぬ一言。夫は夫是は是。献上の音物間を違はせて某に。恥辱を取せん工よな。ヲ、此横山が下知に付和主達。進物の品にもせい。悪ければ悪いと眞言に云が我役但又。碎た物でも披露せいなら。披露致そか。サア夫は。ドリヤ持參仕ろ。ヤア不骨の横山。地目に物見せんと切付る。是はと祝餅付入て烏帽子のまねき切落され。狼狽廻る折も折。お次に控へし土川言藏走出。調判官様御短慮なりと抱留る。地イヤ放せ眞二つ土川放せと聲の内。倒つ轉びつ横山は這々フシ館へ逃歸る。地力勝りの判官兼氏。振放し何處迄もと追駈る。イヤハ、させぬと土川が跡に續いてフシ追て行。地スワヤ喧嘩と館のはいもう家中の面々。御門を打よ

と聲々に呼はりく馳違ひフシ上を下へと返しけり。地結城六郎走出。調喧嘩の相手は小栗判官。横山郡司に意趣有て刃傷に及びし所。土川言藏有合せ。早速に抱留。郡司は館へ逃去たり。旁此旨門外へ觸知されよと呼はる中。地斯と聞付郷右衛門。調シテく主人の身の上は。エ、郷右衛門遅かりし。兼氏事は次の間に。御前の評議を待斗と。地聞よりハット大地に伏。拳を握り牙を噛無念。涙に昏居たる。地稍時移る館の内暫し鎖る廊下口。徐々と立出るは執權石堂右馬之丞。六郎に打向ひ。調貴殿の家臣土川言藏。早速に兼氏を止し故騒動は鎮つたり。兼々武士の心掛神妙く。足下には彌儲の役。土川を相從へ。變應怠る事勿れとの嚴命。隨分心を付るべし。地早速々と有ければ。ハット結城六郎は。フシ御前を指て入跡へ。地近皆小姓が三方に腹切刀目八分。フシ携出る。小板敷。庭の傍に郷右衛門。見る眼涙を抑隠し。フシ只平伏てフシ詞なし。地然れば漢高に三尺の劍居ながら諸侯を制すとかや。其諸侯たる判官兼氏。横山郡司を討洩し無念の上に生害も。直に館の掟ぞと。素袍の袖を笄にて綴る。故實の御前細。打漏れてぞ座に直る。地右馬之丞聲を掛。調如何に兼氏。私の趣意を以て横山郡司に手を負せたる狼藉。館を憚らぬ慮外の段。然るに依て所を去す。切腹致すべきとの上意也。檢使は則ち右馬之丞。心靜に御用意と。地仰を聞より莞爾と打笑。台命畏り奉ると一禮し。ヤア郷右衛門慥に聞け。此度役義を蒙より。横山に相隨ひ差圖を受たる今日の刻限。遲速を言立無禮の難言。度々に及ぶと雖も。大切の變應首尾能勤奉るが。君への忠節。家の情ぞと堪忍せしに。再三に及ぶ法外の惡口。此上に了簡せば。腰脱武士と世の嘲り。家の瑕瑾も口惜く。只一討と思ひしに。地打物短く心は急。言藏に支へられ討洩したる無念さは。骨肉に染渡り。億萬劫を経る逆も思ひ忘るゝ事あらじ。調汝國へ歸りなば。由良の助に。ナ。郡司に止め刺ざりし。心外さを能傳へよ。早速地歸れと矢に郡司を助けし殘念涙。身を振したる憤り。檢使に立し右馬之丞。太刀取近習に至る迄。表は義心の武士も忍びの涙はらく。互のフシ心ぞ哀なり。地郷右衛門は這寄指寄。調御仰の一々畏り奉ると。地言宛見上る主君の顔。此世の名殘見納め

かと思へば五體も碎くる計。浮む涙は露のフシ玉。風に。亂るゝ如くなり。詞南無三寶後れたり。最期に未練と人々の輕蔑も恥かしと。地雨の袂の斧を。振切く。フシ袖脱かけ。地三方引寄せ九寸五分。押戴きく。弓手の脇腹ぐつと突立。引廻し。詞ヤイ郷右衛門。ハア。残り多きは第一學。ハア。フシ存生て今日逢ぬが殘念。ハア。某也。御無念さは此期に及んで一言も。ヲ、サ。地云にや及ぶと兩手を掛。ぐつくと引廻し。苦數息を。詞返す。此九寸五分は由良之助へ篋。ハア。我體憤を晴させよと。地切先にて吭切投出す血刀太刀取が。刀を當るを檢便の石堂。詞役目は是迄屍骸は原郷右衛門に給はる間。心任せに葬るべしと。地云捨奥へ右馬之丞。皆引連て入にけり。地立間遲しと郷右衛門。血刀取上打脉。ハア。瀝と計に伏沈む。敷は外面に聞えけり。地誰かは斯と告たりけん宙を飛來る大驚傳五。詞南無三寶早門々は閉たるな。主君の安否。地如何と計足も空。行つ戻りつ。フシ身を焦迫。地山形兵衛は鬼鹿毛を。奪返して家來に牽せ。來掛る向ふに傳五を見付。詞ヤア狼狽者何して居る。身が旦那を切付た狼藉の判官兼氏。只た今腹切たと。地聞より仰天。詞ヤア何と。主人は切腹召れたか。地エ、遅かつたり殘念やと。拳を握り攪と伏。地無念の涙ぞ道理なる。地山形兵衛が仕たり顔。詞判官が死亡跡。扶持離れの浪人張能氣味く。兼氏が乗捕た鬼鹿毛も。飼人が無ては入ぬ物。引立やつと呼はれば。地傳五大にむくりを沸し。詞笑太い事を吐放たり。主人が秘藏の名馬と云。今日出仕に召れし鬼鹿毛。主君の篋。斷なしに盜賊奴等。美々渡して宜物かと。地引立掛るを兵衛が下知。茅の穂先拔連て追取圍支たり。シヤ一寸口才なと拔合。二人三人一時に難立く切立られ。馬じや。踏れなと皆フシ我一に逃て行。地鞍の山形兵衛が工面。乗て逃んと打跨。鎧を合せ驅さする。嗚呼大驚大手を廣げ。平首擲んでこりや。五間三間一路。機を打て。フシ眞逆反。地落るを直に大驚が翻りと飛乗早足の達者。兵衛はちが。目を白黒。逃行跡の高堀を。乗て越んと諸鎧。踏張立たる堀の内。地出合頭に郷右衛門。詞ヤア。大驚。定めて様子は。ヲ、荒増は今聞た。嗚や無念の御生害。ヲ、サ。何を云ふ間も主君の御運と。

三 冊 目

地目と目に知す無念の涙。御憤りは又重て。藤澤寺へ尊骸を納めて跡より追付ん。汝は是より本國へ。由良之助への御簀。血汐の儘の九寸五分。地澄と手に取押戴き。見遣る生血は我君の。魂残す簀かと。思へば胸も鞍坪に。落るラシ涙を打拂ひ。忠義凝たる武士は雲に羽を伸大驚傳五。直に打立早打は片手手綱にハイく飛が如くに。三重驛行く。

地淀川のフシ大川筋の前に受北は名に負ふ蜷川。河と川との堂島や。氣も永來町の家續野間屋の借屋假住居。鍛冶商賣の平右衛門昔の劍菜刀の。錆零落て古釘を直す。靴の風さへも吹力なき病の床。重き槌よりお輕とて妹が傍の看病に。煎じ藥の上る間と。フシ一間の口に立寄て。詞申し兄様申し。此間はお食も進まず。何ぞお好有ならば。地拵ましよと窺ふて。障子明れば平右衛門。苦しき枕を漸上。病疲れたる息を吐。詞ヲ、お輕か。中々何にも望にないが。此母者人は未かして聲がせぬ。アイ。長町の毘沙門様へお百度。今少つと隙が入ませふ。地下レ最ふ藥が上らふと。立んとすれば。ア、否々。詞木津藤安の言しやる通り。大人參でも遣はずば。常體の藥では浴せても利ぬと云れた。と云て急に才覺もならず。隣の長七の供するである。彼人も夙から人參を吞したら人復も有ふ。高が隣も糖質の風體。息子の才兵衛は若い計て小氣な男。世話やいて遣にや成らぬ中でも。エ、折悪い大病。弟の忠吉など遣て置きやと云たが。どふて家主殿のお世話である。最愛い事じや。南無阿彌陀く。吾が病も人參次第で本復さすと言遣ても。中々大抵の金じや買れぬ。ア、是も案じまい。南無阿彌陀。ドリア。地又横にと打傾き。フシ枕取手も。便なき。地お輕は最どフシ目に涙。地コレ兄様何故其様に苦に持て下さんす。隣のはお年の上の大病。お前はまだお若い身。鳴様も疎々して方々への願立やら祈やら。どふぞ直して遣たいと肝精張て居さんする。人參の事も私が才覺する程

に。必案じて下さんすな。隣事も苦にせずと忠吉を付て置た。何事も構はずと心儘に御養生。若此上にお風邪でも引せましては成まいと。蒲團を裾に打着せ。フシ障子引立。地ホニ薬が宜らふと。茶碗に移し持運ぶ。フシ心遣ひぞやる瀬なき。地折しも呌笑。一群に灰寄戻りは隣の門。息子の才兵衛が白無垢上下。鍬難墮落。引ずる足を忠吉が。片手に骨桶手を引て。跡から抱へる道心者。サア。内へ這入しやれ。コレ氣を付さしやれと忠吉が。介抱する聲聞付てお輕が頓て走出。詞エ、才兵衛様何とした。眼でも舞たか。地コリヤ如何じやと。フシ疎々胡亂。立騒ぐ。地忠吉は長敷。詞コレ姉様。骨下仕廻て戻り品。極樂橋を下る時。遂につて轉てじや故。二人して起してもろくに物を得云ず。笑ふたり泣たり氣脱の様にナア申し。否モウ所が所じや故。亡者が取着的物で哉。斯しても置れまい。サア。俱々に手を引て。地マア。内へと三人が。起せと足は片形。詞エ、是は拟才兵衛様。お輕じやが見知てか。ムウ。女房共。覺て居る。コレ女房共聞えぬぞや。何故葬禮に出て給らぬ。地吾は出ても濟こつちやと。フシ何を云やられたはゐなし。地誰かは斯と家主の野間やの久兵衛駈來り。詞コレ。如何じや。氣が付たか。日比から小氣者。親に離れた力落し。何や角やが苦に成て。道理。といへど指當り迷惑は家主。永々の煩ひで着た物は固より。親の骸を取置代も無と云て此才兵衛がこちへ來て段々の。頼下地に宿賃も重つた。上煉藥代の。藥代の何のと錢の取換も餘程有質商賣の事じや。何成と持てお出と云たら。糠賣の内から侍ひか何その様に。具足腹巻を持て來た。古道具屋へ出したら三文にも買まいけれど。笑止にも有。早ふ葬禮も爲したさ。コレ坊様太お世話じやげな。聞ての通りじや。墓布施も借物も。安ふ付様にして遣て下されい。どふで宿も替さす程に。七日。百箇日の吊も。此方へ渡しに差ませふ。ヤア斯しても置れない内へ入て。ヤアコレお輕。其方の事も。死だ親父の長七が。息子が嫁に貰ひたいと云て居た。才兵衛も得心て有げな。スリヤ退た中でもない世話して遣や。シタガ其方の兄貴も寢て居るげな。少と能かの。アイ。イヤ最大分惡ふござります。人參を入ねば本復がヤア悲しや。又

厄介の掛らぬ様。コレくく。吾が醫者は聞て遣ろ。其代藥代其方で仕や。今から思覺を仕て置や。忠吉太義じや。坊様今のを合點か。ア、世話くく。調成らぬ者に家賃て。家賃は取らず。地刺葬禮込。四二天作て算盤の。柩が違にと咄々我家を。指して立ち上る。地跡にお輕が。ノウ忠吉。此方へ連れし俱々に。介抱とはフシ思へ共。地兒様が寢て成れば噓様が氣に掛て。兎や角と思召矢張隣てナア申し。調ア、否々。佛の事なら愚僧が役。病人は何共早。ア、否申し。介抱は私が弟の此忠吉を付ます。お前様にはお勤を。ムウ如何にもく。其ならば兎も角も。地サアく傳手に介抱と。隣へラシ伴ひ入にけり。地時しも此邊人立の目目に立ぬ形粧。蜻蛉の八に五下の青二。鬼の市連三人連。鍛冶屋の門口フシ窺ふ所へ。地戻り掛りし姉お輕。夫と見るより取廻し。中にも蜻蛉が濡い顔。調コレ姉御。お前私等見知てじや有。預た物は如何さんすぞ。五下をお越しや今日の明日のと。餘り埒が明ぬ故皆連立て。ア、成程お道理てござりますが。此方の内にも大切な病人やら。隣にまで俄事。何卒明日迄。ア、コレく女中。此市が稻荷山で。此方様の鏡袋は五下に渡した。代りに遣た紙入。中には二兩の小判。コレ是が其方の鏡袋。ソレ戻したぞへ。宜か。サア預た紙入今下んせ。サアくく。成程是は私がのじやが。マア是は其方へ。ア、否々々。コレ此五下が責咎に來て。中でも吾が仕た様に仕扱れるわしが面晴。夫て二人を連れて來たのじや。此方様のを戻したら。早う出して仕廻んせ。イヤ最其様言れては消たい程術ないけれど。ナ。少と入いて叶はぬ急な事で今日は何も。エ、如何な人様じや。蜻蛉よ。彼通りじや。ハテ宜わい。今を見せざ成まいと。地懷から帳取出し。調コレ今日出來ぬなら仕方がない。エ、イ其りや忝ふ。ア、コレく禮は跡で。マア是れ見やんせ。アイく。是とは何ぞと。地押明て。調ムウ是りやお前方の。お仲間の名寄帳じやないかへ。サア夫合點なら判さんせ。アノ私を仲間へ。サア這入んすりや毎迄も。又。取返さいでも大事ない。ヲ、めつそふな。仲間へ這入て如何濟物と投返せば。否なら斯じやと。地三人が。手ん手に小刀刺器を逆手。サアくくと取巻て。遁さぬ手迫も重る難義詮方。黙々

打諾き。詞成程判しましよ。ヤア。得心か。アイ。致しましよ。ムウ宜ごんす。其なら爰に矢立の筆と。地渡せば取て名の下へ。詞ヲツト能々。前書に書た文言。コレ能見て置んせ。おかる様サア這入んせ。地皆往けくも目遣斗。跡を云ぬが仲間の固め。フシ目と目を見合せ別れ行。地跡にすつくり見送るお輕。口惜涙。胸の癢。撫下しても逆上フシ心の内ぞ苛しき。フシ餘所にも哀鳴鉦は。隣の夕時念佛も。身に染々と聞ゆればフシ最ど。涙の獨言。詞大切な兄様の煩ひと云。混交た身の難義。地纒の金を預つて戻さぬ故に可有もない。盜賊とやらの其中へ。否と云ば殺すと云。戻さぬが私が誤り。と云て欲でもフシないわいの。詞ア、儘よ何とせふ。宜々。母様に慇懃と頼んで遣たりや大方に。能返事も有である。其時には。ヲ、夫々。由無い事を苦にしてゐては又癩の種。ホンニ才兵衛様は何として。馴な病氣が發た事じや。シタガ起るも道理。貧しい中に爺御の煩ひ。膽斗氣を打しやんした物。わしも女夫の約束して。舅御の介抱も俱々せうと思ふ中。彼兄様の病付と。年寄た母様が疎々さんすも最愛ほく。長七様の介抱も袖に成た。夫て先刻に才兵衛様が。葬禮にも出なんだと只た一口恨口。私が身節に釘刺如く。コレ堪忍して下さんせや才兵衛様。お前の事は。譬今の御病氣が御本復ない逆も。毎までも見捨てはせぬぞへ。譬何國の浦迄も。身に引掛て見放す事ではござんせぬ。必ず恨んで下さんすな。地最愛のお人や。恨しの世の憂やと。云ふては歎く胸の内。幸絶を亂す如くにて。フシ兎角涙ぞ果しなき。ヲシ斯とは知らぬ。母妙三。向ふの首尾も能機嫌。惘然戻る日暮前。詞娘其所に何してと。地云に恠りヲ、母様。テモ早かつたと何氣なく。伴ふ一間をフシ差覗き。詞兄は尋はせなんだか。何ぞおまして給つたか。アイ。留守の内尋でも。何にも否とて寢て計。兎角今の人參の。藥でなければ治らぬとの悔言。今涼々と寢入てそふな。そして彼春日やの。ヲ、宜ともく。毘沙門様から戻り掛往たと思や。喜右衛門様も内に成。其方の手紙も見せた上。段々様子を咄したら。追は馴染の親方様。其方の心は知てなり。成程おかるも得心て。出よと云文も來た。氣の堅い叮嚀者。嚀子の時も繁昌したお梶。望の通り二年切て五拾兩。手形は此方へ入込て。お袋の

一判で済そ逆。コレ金も請取たと。地首に掛たる絹財布。久し振て此母も小判の顔を見たはいのと。渡せば取てフシ押戴き。調太い苦勞でござんした。そして私が入込は。ヲ、日を見てから迎ひに遣と。大腹中の旦那殿。内儀様も悦んで。馴染のお梶の出やるとは。嬉しうござんす。能心得て呉いと言傳があたぞや。ホンニ左様でござんしよ。マア、何か差置で。人參を調へて。本復をさしませふ。地今日と云ても日が暮た。翌早々夜の内から。調ヤ夫は左様と氣の毒は才兵衛様。地灰寄の戻りから。調シタカ此咄しは長い事。地灯でも點して後の事。マア此金は錠前の衣厨へ斯と引出の。中へ篤くと納戸口。母は毎もの看經に。毘沙門様へもお燈明。お輕も付て入相時風さへ四方に靜なる。地病架の障子徐々々と。枕を上げて平右衛門。九死一生引換て。強氣五調眼色迄。常に見馴れ旅出立胸も丈夫な衣厨の錠前の入たる金を盗足。指足密と手を掛けて。挑ても開ぬ氣の機轉。有合道具の鑢。仕て遣たりと捻開て。引出す財布を我首へ。フシ駈出す足音何者と。見付る妹が聲の内。母も駈出縄付。盗人遣ぬと引留るを。振切る拍子に顔と顔。調ヤア平右衛門か。兄様か。コリヤマアお前は何として。地氣丈な事やと二度悔り轉る。母が震聲。調叔は病は虚じやよな。そしてマア彼様に。衣厨の引出し挑開たは。委細を聞たか見て居たな。アコリヤやい。此様に達者な者を。大病の死ぬるのと。偽とは夢にも知らず。人參入たら本復もと。思へど一錢一文の。思覺仕様も詮方なさ。願參りと嘔吐て。妹が身を賣に往た。其價盗んで何處へ行心ぞ。地お輕が手前もフシ恥よかし。調如何した思案但し又。貧苦に盡て兄弟や。母を見捨て欠落か。地サア有様に云へくと。髻握つて引廻し。呵る詞も半分は。不憫さ餘る恨泣心は。フシ涙に顯せり。地ぐつ共云ず平右衛門。フシ指伏向て居たりしが。地涙拭ふて顔を上。面目ない妹。母人のお腹立御怒。一々段々申分んと息を繼。調私此家へ戻る迄仕た主人は。小栗判官兼氏公。其家の足輕役寺澤平右衛門と名乗勤る所に。主君小栗公。横山郡司が爲不慮の切腹お家の騒動。家老大岸由良之助利雄殿。本國常陸に籠城して。亡君の仇を報ぜん爲。十人の殿原に三十餘人の旁々。一味徒黨の折柄。此平右衛門も御加へ下さるべ

しと願ひしかばア、否々。三十石以上は格別。夫より下の給人扶持人足輕は。猶以御恩も薄し。連判には叶はぬぞよと有し故。地すごく、當所に立歸り。仕付もせぬ鐵治細工。鐵床に打槌より。敵の首が討たいと。明ても暮ても夫のみ計。知行の高下は兎も角も一合ても殿の御扶持。其御恩を報ぜんには鎌倉へ立越。横山を一太刀と思込。詞イヤイヤ。夫には若干の金がなくては行難し。と云て人にも云れぬ時宜。地一人の妹に勤せいと猶言れず。言ねば金の擔當はなし。詞先斯様く、と心で計畫。病氣と言立引籠り。體を纏て此通りに幾重巻。腕の筋迄巻たれば急時も脉も斷切て。人參の沙汰にもならば。所て妹が差詰に。身を賣ならば其金を。斯々せふと思案の坪。地今日と云今日コレ母人。不便や妹が身の油嬉しい半分悲しさに。身中の汗は熱湯より。熱い涙を漏し居て。震ふ體を心で押へ。詞ア、否否。母へ不孝も妹が事も。忠義じや物と思改拵へ置た旅裝束。蒲團の中で用意して。此出立も此金も。地御主の爲と諦めて母人おかる何事も了簡して給へ堪へてと。誠を明す寺澤が。忠義一途の志。フシ頼母數も又哀なり。地始終を聞て母妹。扱は左様した心とは夢三寶知なんだ。常から貧に生活故譬の貧の盜かと。善無ふ云た堪て給も。赦して給もと乞るにぞ。フシお輕も俱に涙聲。詞サア私も心では。様子も有ふと思ふて居た。お主の爲と云事を夙に知たら此身をば。一生賣ても惜はない。地知らぬ事逆纏の金。詞否々妹そふてない。纏と云ば我連も。足輕風情の小身者。主人の御恩を報ずる謂外でもなし。君御存生の御時に鷹野の供に召連れ。野道畔道行先も。馬上達者の小栗公。如何は仕けん堤の原。駒の足並踏腕深田へ落んず其時に。地透さず某召たるお馬の平首を。無手と抱けば小栗公。魏然と下立其機會。馬諸共に。某は。深田へどつさり落重り。馬は強し詮方も。漸堤へ引立たり。其時新道源四郎。後馳に駈來り。詞聲をも掛ず我を手討と拔刀。御目早くも兼氏公。ヤアく如何に新道聊爾すな早まるな。是はコレ全馬の佩芥なり。寺澤無は此兼氏。適恥辱を取るべきに。美くも彼が勵故。惡所を無難に遇れしぞよと。地眞美の詞に新道は頬を赤めて。フシ歸宅の御供。地其後我を御前に召。褒美に給はる十俵の。俵の數より御機嫌は

益主君の御目鑑。曇らぬ御代て有し物其家來が今の此身。拙き運と無念さと筆を握り語りしが。詞然れば其時の有増を。知たは八藤長七殿。是も一所に親子連國を退て相隣。親に離たアノ才兵衛。病氣の様子も聞て居た。ノウお輕。未だ其上に盜賊の金迄も。皆吾故に苦を掛た。地四百四病の病より。貧より上の憂艱難許して給妹。母人申し。一時延れば一時の不忠。地最早お暇給るべしと。願へば諸きヲ、出来した。詞改め云ふじやないけれど。其方衆の爺御前も。昔は九州松浦黨。殿の召るゝ御船の楫取。故有て浪人し昔の名を其儘に。梶忠兵衛が中娘。地梶と云しも紀念の名殘。地忠吉に逢やらぬか。詞ア、何の。是より家主へ立寄て。萬事を宜しく頼置ん。ヲ、如何にも。隨分無事で。お去らば。地去らば。夕闇に等買て。フシ被せる價さへ。涙で知らせ。大坂を立別れてぞ。三重へ出て行

四 冊 目

地横山郡司信久は桐ヶ谷の下屋敷に。老を養ふ身の用心。其身は僅の疵保養。詰りくは寢ずの番。奥女中に酌取らせ晝夜を。分ぬ酒宴の興。出入人にも氣を付て門戸を閉ぬ計なり。地お傍を離れぬ。必共些氣晴しと立出る。中にも歌木が皆の衆。詞朝から晩迄御酒の相手。間の押の手許のと無理の有條仰しやつて。命すやくと御寢なる際。尋たい事外でもない。奥家老角谷角兵衛殿を傍へ呼。明日は塀を何様させい。今日は御居間を斯せいと。お醉が醒ると普請の云付。地何うても奥様を迎なざるゝ拵かと。云へば二人が顔見合。詞ホ、。歌木殿とした事が。アノお年で奥様所か。此方は有付しやつて間がない故。何も様子は知らしやるまい。此方の旦那様は小栗判官兼氏様と殿中で喧嘩を成され。其相手の小栗様は切腹なされ。跡のお家も絶たげな。其家來の浪人衆。澳の長監と云人も此館へ入込。常陸に御座る家老大岸由良之助殿が。預つて居さつしやる小栗殿の弟御一學殿とやら。其首を討て來いの何

のと。又其上方々へ人を遣はし。犬とやら猫とやら。萬一の時の逃道。其爲の普請沙汰。奥様呼ての鑑三昧。地突事よりはお主の身を。つかれぬ爲の用心じやと。フシ跡は笑ひの其中へ。地今を盛の男振奴と見える看板は。紺の大なし案内なし。小腰屈て切戸の内。フシ縁先に搔躡ひ。飼拙者めは樂内と申奴でござります。此お家體にはお草履取が入用にねまり申すと。肝煎から知らせて参りまらしてござります。御奉公すべいら行べいとござりまらす故。参りまらしてござりますと。地訛散せば。地共。調テモ澤山なござります。女の前では不遠慮ながら。其通り申上ふ。御目見は後程此方から知らす迄。供部屋へ往て休てる居や。ナイくく。地然らば左様と内證口。フシ勝手の方へ入にける。地跡にお絹がノウお里。調彼男も能恰好。奴にするは惜いじやないか。ヤ惜い次手に歌木殿の氣に入香具屋の勘七は。何としたか此四五日は顔も見ぬ。口舌でも有たかや。ヲ、名立が間敷悪口をと。地中能中のフシ切戸口。地入来る香具屋勘七と。身を省したる油賣。葉山茂山花の露。淺香。五十嵐蘭奢香。吟出し艶出し召ませい。油召せとぞ云入る。地イヤこそ人言目代置け舌も引ぬに香具屋殿。皆が待て居るはいのと。呼れてハイく。這入庭。卸す重荷も懸盛浮氣盛の。地共。調此間から見えぬ故。引こき髻やら櫛卷やら散放髪に成て居る。毎もの様を下されと。地口々云ば。調ハイくく。仕たがとお前方は聞へませぬ。世間には風邪が流行。我等も一番大肝癢。湯水も通らぬ大熱病。夫にマアお心強い。お前方の内只たお一人。見舞に來て下さりまして。まんざら罰の當る事も有まいに。根が堅い鬢付賣。足が強うて踏留り。漸本復煉返し。今日お目に掛商ひ。ずつかりと買て貰はねば。我等が身代自絞。扱々氣強いお方じやと。地歌木を尻目に當言交り憂が。フシ中成戀路なり。地お里を始氣も付ず是は扱其様な事とは知なんだ。調如在のい印には。何にも彼も買ませぬ。地機嫌直して色品をサアく見よふじや有まいか。調毎もの通り前口上所望く。と立掛る。地何を申すも商口。お聞成されと扇を翳し。調先は油の故事來歴。申も愚千早振。髪は油は神代の昔。女神男神の二柱。浮橋に立並び。陰陽和合の煉加減。其逆鋒の一雫。煉固まつて油と

成。夫故戀の種油。叶はぬ戀も行々々。さらかし。上撫下撫 斧 鬚。島田に取ては大吉後家風兵庫鬚。元結なしにも
 綿四手の髪の色艶透明る。詞美男鬘の筋立入ず。牛蠟遣はず和蠟の精粹。唐蠟が自から龍腦麝香に向ふが如く。白檀
 梅檀沈香甘松匂ひは種々候へ共。我等が家の秘傳香跡から脱る事云ず。當世油の根元根本。舞臺油舞臺紅。齒黒筆色
 楊枝。桐の箱の御用物。地お望次第と云立る。地氣轉の歌木が此場の首尾奥へ遣たさ何を哉。詞ヲ、夫々。先刻の奴
 がお目の取次も忘れて居た。眞に喃ふ。口上に氣を取られ其取次を。地忘れたと二人は奥へ走り。地跡は遠慮も指
 向ひ傍見廻し小聲に成。詞此程はお顔も見ず。尋ねに往ふも任せぬ身。地案じて計居た物を。當言交りの口上は。聞
 へませぬと手を取て。忍び涙に恨ける。詞ヲ、道理じや去ながら。思ふ中の小鬪靜。可愛餘りじや堪忍仕や。此間來
 無ん達は故郷から便宜も有。何や彼や隙入計大望有此體躰一つするにこそ。其大望の願に付。其方を頼にや成ら
 ぬ筋。彌心は替らぬと。誓言で聞たいく。ヲ、改つたお尋。私が心は此通りと。地懷より取出す一通。是
 を見て下さんせ。詞是りや起請じやないか。サア何て有ふと披て見て。ムウ是りや其方の年季證文。是を見いと
 ハテ。私や此屋敷を暇貰ふて出る心。暇さへ取ば主ても家來でもない。其爲の其證文。ウム尤。シテ其心は。ハテ
 爰に居ては女夫に成れぬ。暇取て出る程に胸を据て居る私。何と。其手形が堅い誓紙で有ふがな。ヲ、適々。此上
 は何をか隠さふ。此館の横山郡司。吾が爲にはお主の敵。シイ。コレ靜に。然してお前の本名は。ヲ、我こそ小
 栗判官兼氏公の御内。早野勘平家次此如く姿を變。入込事は入込んで。用心厳しき折と云。敵の面を見知らねば仕
 損じも有んと様々と心を碎き。其方に便て今日の今。我本心を明す上。彌手引を合點か。サア夫も合點なれど。
 地若も手引が顯はれて私が先へ討れまい物でもない。詞譬お前に先立共。未來迄も變らぬ女夫。必ず違て下さんす
 な。ヲ、云にや及ぶ。二世も三世も。夫婦の契は變らぬ。其聞て落付た。地ア、嬉しやと抱付。妹背別フシなく
 見えにけり。地勘平は振放し。詞期何時迄も安閑と仇に月日を送る事。草葉の陰の亡君も不甲斐なく思されん。斯程

の首尾も又有まじ。地用意は爰に、荷箱の枴仕込だ刀を小脇に挟み。フ早駈入ん屹相なり。地歌木は驚きコレコレ。詞一間く番衆の中。多勢に一人過は知た事。お前に馴染だ抑から。斯で有ふと思ふた故。萬事に心を付て居た。詰りく何程共間道を拵へてアレ。彼の井戸も其用意。晝ては事の仕損じ有。晝の間は身を忍び暮るを待て兎も角も。イヤく。時を延す其中に若も餘人に討せては。存念も水の泡。留立して怪我すなと。地駈入を引止め遣じ行んと争ふ所へ。爾若者待と聲を掛。地以前の奴走り寄。詞子細は有増立聞した。ヤア夫聞たら赦さぬと。地するりと拔て切掛る。翻然と交し待たく。待とは卑怯と又振上。附入向ふへ投出す一腰。詞聊爾すな手向ひせぬぞ。勘平待て早まつて後悔するか。イヤ早まつとは何が何と。ヲ、急す共驚くと聞け。主人の仇を報はん術。眞満と斯迄仕課ながら。九つ梯子の七つ八つ。今一段の所に成。仕損じて跡での悔。見拔て留たは御邊が爲何が何と。イヤサ留たは身が忠義。ム、左云利主は名は何と。ヲ、寺澤平右衛門。小栗家に仕へし足輕。同家中で有ながら。互に逢は今日初め。ムウ夫りや御邊も同腹中。忠義の者が何故留た。ヲ、尤。留た子細能く聞。古傍輩の面々方々に引別れ。一味徒黨は僅なれ共。家老大江由良之助。御舍弟を守立末籠城と聞及ぶ。然すれば敵横山郡司。油斷せぬ其中へ。切込は不覺の基。彼相馬の將門が七つの影を拵へて。用心したる例も有。既に朝日が三つ迄並んで出たと云。噯。尤手引が有にもせよ。臆首討て手柄に成か勘平。篤くりと實否を正し。面體も見認た上二人が心一致して。本意を達する計略は。横山に油斷さす術と云つば。御邊も我も今日迄。顔を見しらぬ傍輩中。我は此家に留まつて御邊を國へ入込せ。郷右衛門大江親子が所存を探り。彌空氣腰拔に極らば。欺し密て切捨なば。スハ由良之助原郷右衛門は討れしと。犬に入たる謀より。此館へ注進せば。敵郡司も心を緩し。身の用心も怠る時。容易と本望遂。信久が白髪盲亡君に手向んは。何と手柄で有まいかと。地勸る詞も理の當然。勘平は只一途心を碎く忠節の。手延にせんも残念と差伏向て詞なし。地寺澤重てノウ勘平。詞斯迄に身を省し忍び入たる計略一朝一夕の工夫でない。夫を留る

も思案の一つ。某連も憂難。一人の老母を残し置。妹が身を賣た價の金を身に付て。傳に傳を頼にも。金銀を賄賂して心を碎くもお主の爲。未此外に一味の武士。中にも八藤長七は隣づからに暮中。地貧苦の上に病死して嘸や無念に有べしと。人を思ふも身を思ふ。悔涙は目に餘り餘所の。フシ袂も濡しける。地傍には歌木勘平も身につまざると思ひにて。我連も此年月父七郎太夫も無念の病死。父に代て本懐をと思ふ一途に斯迄も。地忍び入しと勘平が心解ば平右衛門。調ヲ、サ。無念も恨も重る敵。今にもせよ折能ば。俱に恨を晴さんと。地歌木諸共急々と諸き騒ぐ人蔭物音。怪められじと平右衛門。切戸の方へ勘平は。フシ荷を片寄て身を忍ぶ。地のかく出来る角谷角兵衛。御前の酒の片形目。調歌木は其所に何仕て居る。能吾を待したなア。毎もの通お傍の相手。汝が來たら助さして。酔た所て日比の本望。機合切て居た物を。追付爰へ酔醒しに郡司様もござる筈。此歌木めは何所に居ると尋てじや。鬼の來ぬ間に日比の思ひ。ハテ扱何を騒囀。斟酌も人に寄。望の通年季手形は盗んで遣る。此内を出したらば當分圍て置約束。マア夫まで手形の禮。ドレ。成共致さふと。地刀を突張立上る。歌木が五月蠅さ見る愁氣。縁側傳ひ逃て行。地後をほうど抱付。調コリヤ何所へ。アレ角兵衛様が悪い事。何所に是が悪い事。よいめに合して遣はいと。地獅噛付たる花の蛇。庭には始終を勘平が扱は欺して先刻の手形。其所を振切逃がしと。フシ焦慮にあせり振放し。地逃入横へ出来る横山。コリヤ仕て遣たと顔と顔。ヤアと悔り酔も醒。頭角兵衛か。ハア。疊にフシ噛付蹲る。地郡司もめれんの高調子大口明てハ、ハ、ハ。調家老殿味遣るハ。身が召使ふ秘藏の蛇。以來を急度と。云所を言ぬは矢張酒の徳。下戸成らぬこそ男なれ。顔に似合ぬ女子好。能濡た。歌木やい。地脇息持と蒲團にとつかと横山郡司。調足を揉々。地潑と角兵衛が立掛る。調ア、否々。家老殿追從措れい。女かはれの。地不機嫌に。何がな御意にとヲ、夫々。調先程參つたお草履取。參れ。と呼聲に。地潑と答もナイ。フシ目通り近く畏まる。地横山横目に白眼と見。調肥豊と宜肉合。生國は何國の者だ。ナイ。九州博多でござります。今迄は何地に居

つた。ナイ。九州松浦黨に仕へ居りましてごはります。地角兵衛聲掛。コリヤ／＼樂内とやら。詞子細有て國所の吟味は後程。先御目見の一通通御覽に入よ。ナイ。／＼と云ひ草履。腰に用意と取出し。振出す手先目八分。宿入下馬先支關前。出陣凱陣祝儀の草履。眞の草履行の草履。擬又高位のお供先。草の草履は常に有。先づ斯直すが口傳の草履で。ごはりますと。二足三足跡逡巡作法正しく控居る。詞愛奴出來した抱て呉ふ。吟味は後刻合點か。と。地云も半分夢現。歌木が膝を肘枕。地角兵衛下知してコリヤ樂内。詞勝手へ參つて休息せい。早立ませい。ナイ／＼。地内證口と奥の方。入相告る燭臺の。フシ數も羞明庭の面。地時分は宜と勘平が。歌木に知らす其風情。此方も油斷遣るせなく。點頭ながら氣も弱く。討すは夫討は主。義理と恩とを二筋に涙班々落瀧津。地顔に掛ければ目をばつちり。詞歌木わりや何て泣。エ、イ。否さ何が悲しうて是見よ。涙で目が覺た。サア申し何てござります。先程御家老角兵衛様。御無體を成れた時。秘藏の者じやと御意なされた。其御言葉が身に染々。有難し共嬉共。心で思ふて居りました。思はずも勿體ないお免し成されて下さりませ。地ヲ、お恥もフシじやと紛らかす。詞ハ、ハ、ハ、何の赦すの赦さぬのと。仕たが吾も轉々寢入た。恐怖い夢を見た。蛇が首筋へ這ふと思ふと身が冷然。汝が涙で目が明た。今一寢入して呉ふ。伽して呉と。地立上り。一間の内へ横山が。フシお裾に小寄風防ぐ。障子ひつしと指込て。フシ歌木は庭へ折も宜。地身拵して勘平が。刀の目釘吹濕し。詞コリヤ／＼歌木斯迄近寄首尾もなし。生る共死る共二人一所ぞ狼狽な。地此一腰と指添を。渡せば受取身構し。詞始終は先刻に見やんす通り。寢首を揺も合點なれど。お前に手柄がさせたさと。一旦仕へた其恩と義理は是迄此上は。私が萬事手引して。ヲ、尤々。熟醉の横山が寢首を取は安けれ共。死人を切も同じ事。地目を覺させて一討と。勇に勇大音上。小栗判官が舊臣早野勘平家次。主君の敵横山郡司。出合やつと呼はつて。地障子を颯と引放せば。四方に闇む鐵の網。二人は憐りコハ如何にと。思はず知らず跡逡巡軋て。フシ暫し詞なし。地内には嘲る高笑ひ。ハ、ハ、ハ、ハ。詞斯あらんと期したる故。拵置たる我城

郭。儕如きの匹夫匹婦。小栗が敵何とくは身の程知らぬ蠢蟲めら。土壇に直して寢酒の肴一々に料理せよ。者共やつと呼はる聲。地畏つたと直宿の武士班々と走り出。通さぬ遣らぬと取巻たり。勘平歌木は是迄と思ひ設し死物狂ひ。左右に別れ切立る。此勢ひに恐をなし。奥庭指て逃入を何國迄もと三重へ追て行。地斯と心得平右衛門折を見濟し飛て出。詞狼藉働く曲者めら。我等に仰付られなば搦捕て奉らん。奉公初めのお願と。地云も切せず出来いたく。詞縛し上て引立來れ。地畏つたと尻引絨げ。早繩。フシしごいて待所へ。地勘平が大童阿修羅の荒たる其勢ひ。詞蜘蛛の巢網を引千切横山が首取らんと。地太刀打振て駈寄を。樂内是にと聲を掛。詞及ばぬ腕立一寸才奴。腕を廻して尋常に繩を掛け。コリヤくく。切抜ても逃しはせぬと。地詞の端に心を付て。フシ居合腰。詞急に急たる勘平が邪魔を廣がば眞二つと。地打振段平任せと。丁ど受たる十手の早速。詞イヤ狼狽者不覺者。何と心得此狼藉。此奴が御意を受。搦て憂目を。コリヤさせぬは。捕たと掛れば身を開き。地互に手練の體術柔。瞬きもせず横山が守詰たる公勝負。庭に二人は根限り小枝おろし膝車。半月三ヶ月霞の當。無双返しや邯鄲の枕を割し働きはフシ花やか成ける次第なり。地後馳なる角兵衛が歌木が行衛を見失ひ。館を搜す高挑灯。樂内制して密まいく。詞御願申して奴めが斯迄に働いたり。仕上を夫から見られよと。地夕闇照す灯の光り捻合ふ機會に膝がつくり。折よと見えしを衣擦。フシ井戸へ噓さり眞倒。地サア仕て遣たと樂内が。聲に悔り横山主従。詞南無三寶其井戸こそは裏への抜道追掛て討留よと。地焦慮角兵衛樂内は。仕濟したりと夕間暮手分を成してぞ三重へ追て行。

五 冊 目

フシ足元早野。勘平が。妻の歌木は引別れ。夫を跡に追人の多勢切立く。桐が谷。裏門通の切通し板垣巴が勇をなし。追來る敵を切散し暫時。フシ息を繼所へ。又も大勢高挑灯。遣ぬくと取巻たり。詞シヤ仰々敷侍連。女一人を仰山

に。打揃ふて御苦勞。何はなく共此一腰。地眞實眞味の御馳走振。調冷然直截冷物。お望次第サア御出せと。
 地詞は甘く手濫い相手。舌震ひする蠅侍。傳手に得物の蕎麥切料理。花粉を散して三重切結ぶ。地烈しき女の太刀
 風に。是りや叶はぬと家來共。フシ一度に撥と逃散たり。地然れ共多勢に此方は一人。數ヶ所の疵に目眩さ。かつば
 と轉べど氣は鐵石。詞此勘平殿は如何してぞ。地心元なや今一度。尋で見んと刀を杖。透這くフシ行先へ。地胡亂
 胡亂眼角兵衛が。透詰めて歌木じやないか。詞エ、われは聞えぬぞ。女房に成ふと云た故。ソレ手形迄盗出し
 て遣つたじやないか。其吾を皮にして。勘平めと手繰合。手引迄ひろいだな。戀の敵おのれから。引摺て往て如何す
 るか見よ。地サアく行せいと引立られ。苦しむ中にも。機轉の歌木。詞マアく待て下さんせ。成程私が悪かつた。
 シタガ其時心に隨ふたら。お前の命が有まい。ムウ夫りや何故く。ハテ不義は屋敷の堅い法度じやないかいな。サ
 ア其所が否さ。奉公を引そふ爲。手形を遣たも其思案。眞にナア。夫んなら今から改めて。談合する氣は。ヤアく
 何と。サア女房に成やんしよ。ヤレく是りや忝い。そもじさへ其氣なら。此方は何時でもじや。ア、否
 否。又酒に酔てゐあろ。何のくすめだ。手を合す。コリヤ斯じや。ア、其心なら嬉しうござんす。そして
 勘平は如何したへ。アノ若し斯云所へ。イヤサく。彼樂内めが勝手も知らず。勘平を抜井戸へ打込だが。只今此
 等邊。這出る所を只た一討。地ハア、夫聞て落付ましたと氣もがつくり。此方は一途に戀の闇。詞サアく。落付た
 ら連れて退べい。地ドレ手を曳ふ。詞先々マア待て下さんせ。最前勘平を捕へん迎大勢の侍。思はず支手を負て。一足
 も引悪い。ヤア。何じや手を負た。エ、憎くい奴原じやな。一々吟味を逐爵憤を晴して遣ふ。コレサ吾が肩脊に
 負て。一先爰を立退疵養生。地サアく爰じやと脊差向るを。詞アイく忝いと。地透し密て振上る。目當は外で
 小鬘先。一寸つりいはされ。詞アイタ、。是りやおのれ欺し討モウ赦さぬ。地覺悟ひろげと抜中に。太股四五寸
 切下られ。片足立に二打三打。付入付入暗許紛れのやたら切。今は女の身も疲れ透進所を乗掛り。鬚片手に引廻し。取

直す刀も危折こそ有。井戸の内より這上つたる勘平が。不疎首筋引寄て物をも云ず。フシ首播落し。地刀投捨駈上り。抱起して。詞コリヤ／＼歌木。勘平が來た氣を付よ。地心は如何にと呼聲に。勃然と起て。詞勘平殿か。ハア嬉しやと地云た計に又がつくり。詞コリヤ／＼歌木。扱は深手を負たるな。エ、今少し遅かりしな。コリヤ／＼。其方が敵も只た今手に掛て討たるぞ。氣遣するな女房共。アイ／＼。お前に怪我はなかつたか。ヲ、サ／＼。寺澤が情故危き難義は通れて來た。此上は一時も。其方を連て退思案。一足成共。詞ア、否々。逆も此身はない命。大事の／＼忠義を抱へ。足手纏に氣が後る。お前は早ふ退ていなふ。地ア、苦しやモウ目が見えぬ勘平殿。去らば／＼と云聲を此世の筐と息絶たり。ヤア。早最後か不便やな。可愛の者の有様やと。其儘痺と縋り付。我に手柄をさせん迎心に染ぬ奉公も。嘸無念にあら口惜かる。堪忍して呉女房と。我を忘れしフシ男泣。心ぞ思ひ遣れけり。地漸心フシ取直し。地斯では果じと立上る。能々思へば寺澤が。意見も今フシ身に覺えたり。地是より一先本國の。安否を聞て又夫葬らんと。搔上抱く。玉よばひ。妻よ夫と契る間も。宵の稻妻朝の露。果敢なき物は武士の五つの道を一筋に行箇。定めず 三重へ出て行

六 冊 目

地動とも。よもや拔じの要石。其大石の底深き。常陸の國に年古し。小栗殿の本城には家老大岸由良之助。御舍弟の一學殿御眼病の慰と。我も元來耕す。フシ銚色變る菊畑。黃菊。紫金はぜの。大刺走り平抱。白きを後と得も云ぬ。花に見蕩る唐達磨。菊を東籬の本末に。其名／＼を短尺の。名も覺能いろは歌。フシ末世に残る花なれや一間のフシ襖押開き。立出給ふ一學殿力彌を伴ひ書院先。花を彼は見廻りて。詞ノウ由良之助。下部にも手傳はせず。

手自精に入りやる故。去年よりは花形も肥太。匙かゝへの力が出来。格別。今年は見事じやと。挨拶有ば莞爾と笑ひ。調誠に殿の仰の通り。去年貴君のお誉成れた。季咲の金はぜを。今年捻つて見ましたが。矢張見事にコレ／＼是じや御覽じませ。アノ又向ふな紫の大輪。あれが白か黄て咲たら。世界に比類はござりませぬと。地自慢手譽の折柄に調勝手口より大次郎監覆たる薬碗。御前に差置て。詞今朝仰付られました。赤鯉と申す魚の膾未持參致しませぬと。地聞いて力彌が。詞イエ申し雀目には何よりも。黄鵠と申す雞の肝が能げにござります。ア、否々鵠や魚の肝て。治るも有と妙藥同前。醫は醫と申せば御藥に増ことはない。今朝法眼が加減の調合。冷ぬ内に御上り遊ばせ。時行物と輕ふ思へど雀目は殊に大事の物。御氣晴しには宜しからんが吹放しの此花壇。風に當るも結句おど毒。コリヤ／＼力彌大次郎。七つ迄は未間が有此花壇よりお好の舞。兄弟は鼓を勤。御慰み申上い。何程日比お好とて毒物は痛うお目に毒。必ず御覽遊ばすなと。地意見に隨ふ御發明。夫なら奥で一指舞ふ。由良之助も休息仕や。二人は此方へと引連てフシ奥の一間に入給ふ。詞ホウ愛する花に遣はれて。お寺百姓かいだるやと。地鉄突張て腰を伸。フシ見遺傍の校欄の木に。年々馴て巢を作る。蜂は花吸水含み。戻るも有ば行もあり。己が様々飛運も。フシ我巢忘れぬ門並び。女蜂は内に待やらん。詞ヤア花を吸に行は戻るは。何を急ぐぞ折知り顔。嵐に連て。山蜂の。羽音も高く飛來り。巢を見付しか飛付風情。數の小蜂は寄付じと。挑は如何にと見る所に。大の山蜂羽を反し。尾先の劔を逆立／＼。即坐に死で墮るもあり。フシ互に争ふ羽の音。雷の響が如くにて四方へフシ颯と散亂せり。詞ハ、ア云れぬ山蜂。好の花は愛もせず。無益の迫合時に取て面白やと。地鉄も放さず由良之助。梢に目を點詠の中に又群々。以前に倍せし數の蜂。巢を八方より取圍。群り掛る其勢ひ。山蜂一つに數千の蜂。中に取込怒りの針。挫まず去らず喰合しが。件の山蜂忽に大地に落れば多くの蜂。勇の羽叩打群て。フシ行方。知らず飛失たり。地詠入たる由良之助。思はず鉄を取放し。詞ハ、ア奇代の珍事を見る事よな。誠や蜂を題せる詩に。百花を採得蜜と成して後。知らず辛苦して誰が爲に甜し

めんとも。又多く群を成し。己が友を集る故蜂起るを蜂起と讀。生得蜂と云文字は。蟲扇に鋒の旁を書。尾先に劍を帶せし謂。ム、時も時折も折。今此蜂の戦ひを主君と此身に比す時は。蜂の巢は殿の城郭。飛來りしは横山峰。口には蜜の忠臣顔鎌倉殿へ讒を構へ。毒尾を以て友を刺。此巢を押領せんと工多勢に無勢目下。ホ、夫々直に敵へ巢を渡し。身を忍び折を得て。徒黨を語合一致せば。横山峰も此如く我手に入ん。ム、すりや恥を捨笑はれても。城を渡すが極上々。ラツラそふじや。く地と一心に。思ひ込だる忠義の腰拔。後にぞ人に知られけり。詞奥様只今御歸りと。フシ知せる内に。急促と妻のお石は心も空。詞ノウ我夫其所にかと地過ぎ體を由良之助。奥へ洩んと目て教フシ徐々座敷へ押直り。詞イヤ何コリヤ女房。小栗が家來に異心なく。城開渡せの上使て有ふがナ。サア夫は左様じやが一大事は。一學様を。シイ。ハテ扱騒事はない。シテ此檢使は。アイ城受取役は山形兵衛。又此方のナ。其檢使は澳の長監。エ、思へばく彼奴がマア。日比お前と不中な迎殿様の御恩を忘れ。媚諂ふて横山へ。率公するさへ憎いと思ふに。剩弟御様の檢使とは。能も望んで出た事。お主の罰か道中から雀目とやらそこひとやら。目を病て居るげなが。わしには矢張見へる顔。エ、腹の立。何かの恨云ふにも。存分恥顔搦そふにも。彼方は上使を笠に被て。痛目剝て睨付。日比放心花を植。遊藝好の由良之助。周章搜して狼狽ふ。今宵四つに首受取隙入て時が切たら。夫婦も首にして歸る。早う歸つて云聞せと。押柄權威も檢使の役。是非なふ受て歸りしが。何とせふと思召。地私や某事が胸に詰り。魂も身に添ませぬと。胡亂く。すれば。詞ハテ馬鹿な。一學様の御身の上。御安否を聞迄と。預り居る某。横山が讒言にて。謀叛杯と申上。此難題も來らんか。其時にはと用心も。兼て心に覺悟の事天道の恵有て。一學様も二學様も。ソレ其方に産して置たじやないか。エ、すりや彼二人の子供の中を。ハア。地激と計に指伏向詞も涙にフシ伏沈。詞エ、死るとさへ云や悲しいか。是迄書物や双紙を讀。忠義を見ては頼母數と。健氣がつて居たじやないか。疊の上で病死したら御恩を受し忠義もなく。むぎく死る可愛やと。不便に思ひ涙も翻れふ。武士が忠義

に死る程。冥加に叶ふた手柄が有か。ア、去ながら女の道。死る時の木やりと思ひ。泣たくば今泣て置。檢使が是へ來や否や。地涙一滴叶はぬぞと。詞尖とに呵られて。お石は猶もフシ目に涙。地何程其様に仰しやつても。兄を泣やら弟やら。誰を何する角すると。譯も聞さず其様に呵て計ござる物と。胸は涙に指詰る親子が中も今日の間に。隔の襖を押開て。フシ兄弟互に覺悟の胸大次郎は悠然に。様子は聞て居りました。詞一學様の御身代。私を立て下さりませと。地願ふを力彌引除て。詞コレ大次郎。兄を指置身代とは。我儘な願ひ成ぬ。御身代には私が立。死だ跡で親達へ。孝行仕やるが弟の順道。是非御身代は此力彌。イヤコレ兄様。お前は惣領。家の苗氏を繼お役。御身代は此大次郎。イヤ。そふはさせぬ。イエ。成らぬと。地命惜まぬ互の迫合。夫婦は健氣を悅びて浮む涙を押隠し。詞ヤア兄弟共先静れ。ホツラ。潔き二人が争ひ。感じ入て嬉しいぞよ。兄弟は車の兩輪。兄も可愛し弟も不憫。何方に生て何方を死ねと。地指圖も迷ふ親心と。差伏向て居たりしが。ヲ、夫々と打點頭。腰に指たる扇を拔取。詞是は伊勢の神主より年禮に來たる扇。則神の御圖同前。され繪は冬花色は青紅。サア兩人共に考て。何の花ぞ指て見よ。云當たるを勝と定め。御身代に立ると。地塵し扇を指出せば。兄の力彌は稍暫し。小首傾思案の中。弟は夫と云た氣に。フシ堅睡を吞て控居る。地力彌は父に打向ひ。詞色は紅で冬花は寒紅梅でござりましよと。地聞より早く大次郎。詞イエ。私は林の花。サア。明て御覽じませと。地披を待し扇の繪。兄は悔り無念の體。詞ヤア嬉しや梅じやく。コレ。母様。私が一學様の御身代に成ましたと。地指て悦ぶ繪合の。得やは言れぬ物思ひ母の心の行瀬なく。悦ぶ弟が手を取て。詞ヲ、願が叶ふてフシ嬉しかる。詞コレ大次郎。云置事が有ならば。檢使の來ぬ間に何成と。地聞して置いて給いのと忍び。涙に昏ければ。母の歎に引されて氣は健氣でも稚氣の。何思ひけん凋々と。詞ア、兄様は羨しい。ノウ母様。力彌様を力にして。御無事でござつて下さりませ。迹も私は短い御祿。相果た其跡では。私が手馴た大鼓。誰にも遺て下さりますと。地死て行身の物惜み。頭是のないて最と猶。不便さ悲しさ母

親の。見合す目と目に堰来て。フシ蔭は淵なす涙なり。兄は見るより不興顔。詞コレ大次郎。母の由なき悔に付死とも無さの其歎か。吾なら己が代ろかと。地負た本意なさ恥しむれば。大次郎は押直り。疊を打て無念泣。詞ヘツエ口惜いコレ兄様。死ともなさの歎とは。餘り成御詞。命惜まぬ證據には最前賭にした扇。私は前に見て置た。覺のある椿の繪。地若もお前が知てかと心浮雲。待兼て。見て置いて指扇の繪。命惜まぬ我性根。何の未練で泣ましよと。心顯す云譯を。聞て扱はと由良之助。健氣な上に名を惜む可憎生長片腕を。先へ失ふ本意なやと。初め呵し爺親が結句は涙にくれけるが。詞ホツヲ夫てこそ我悴出来した。ヤア力彌。其方は惣領なれば。父が家名を繼が道。武士道に外れし扱と。必ず無念に思ふなよ。地箸折鏡の兄弟中。此世の結びも今暫し心を晴し中能して。弟が切腹せば。我に代て介錯せよ去ながら。詞腹の切様介錯の仕様。端々語た計にて。稽古逆もさせぬ業。鎌倉の檢使が見る前。見苦しい死さ。介錯の仕さま扱と。笑はれぬ様覺悟。地云を弟が引取て。詞そりやお氣遣成されますな。腹切に何の子細。三方の刀を戴き。左の脇腹へ五分計突立。右へ存分引廻し。又介錯への挨拶は。左の手を上げるが作法と。地語れば力彌は立上り。詞私が介錯は此様に致しますと。地腰刀をすりりと拔。傍に生立櫻櫛の木を。中より透許切付る。皮目は残つて蝶鉢。介錯の手の内は斯の通りと武士の。種を顯す花の兄。植て詠る親の身は。嬉しさ悲しさ咲交に。十分に一分は悦と悲しい方は九分九厘。一輪満る月代に日は入がてや寺々の。鐘さへフシ胸に響らん。地お石は不圖心付。詞ア、彼鐘は早入相。檢使の來るに間は有まい。地如何もならぬ彼長監一學様に逢さずば成まいか。詞ホウ其事は分別有。心得ぬ彼奴が眼病。逢た上の臨機應變。隱盲を此方から。喰ふた振して方便は様々。某は一學様へ何かを篤と申上人。地其内にも入來らば。宜しう挨拶隙入て。我出る迄待して置やれ。詞ヤア。力彌大次郎。其方達にも此間に。云含置子細有。地此方へ來よと兄弟を。引連フシ内へ入相の。地兼て仰を守り居る玄關番が聲高く。詞御檢使様の御出と。地報知の聲に班々と。廊下長縁廣書院數の燭臺照し立。待間程なく入來る疊障も疎

暴に。檢使を劫に緩意類。見るからに憎き澳の長監。座敷勝手は古傍輩。刀を杖にとつか。フシ傍脱付歩来る。
 地お石は頼て出向ふ。足音聞て立留り。詞ヤア由良之助殿。イヤ／私は女房石でござります。サア由良の助に檢使
 の趣。聞されたかと云ふ事さ。ハイ歸ると直に仰の通。申ますと我夫は。一學様に其御用意と。奥へ參つて居られ
 ます。地イザマア是に御緩りと。云ふ座にどつかと打居り。詞ア、いはれぬ和郎を守立て。役にも立ぬ世話せふよ
 り。今夜埒を明て仕廻ふは。天狗に瘤を取れた様で。夫婦の衆も氣樂で能かる。城も渡して天竺浪人。前度か望の
 通り。草花を好たり植木屋翫が。浪人の飢渴便。若珍らしい花でも有ば。我主人横山殿へ申上。渡世に成様世話をや
 いておまさふぞ。地古傍輩の好みの不祥。左程の世話は仕て遣ろと。人を見下す傍若無人。フシさも憎體成詞の中。
 地奥より徐々由良之助白無垢淺黄の長上下。雀目を試す衣紋付。若も答は一討と。忍びの鰐元寛げて長監が前に出。
 今宵の御役目御苦勞と。挨拶も卒爾に。詞コリヤ／力彌大次郎と。地呼出す聲に兄弟は。淺黄上下白小袖。爽に
 立出れば。地妻のお石はイヤ申し長監様。詞大切な若殿の御生害。其御座敷へ列るは侍の公の場所と。二人の子供
 に物好の小袖袴。見て遣しやつて下さりませと。地挨拶すればラ、誠に。詞兄弟共に好模様。別して舍弟の染小袖。
 格別立派に見え申すと。地響る無的の宛推に。扱は實の雀目ぞと。寛く胸の奥の間より。御勞敷や兼家君。此世の際
 と打情。衣光澤に取形も。フシ荏る花の根に落て。歸るフシ古巢の雀目病。地由良之助立寄て。御手を取て上座に直
 し。詞檢使の役目長監殿へ。御挨拶遊ばせと。地知らせる聲に一揮有。詞ラ、長監。以前は我兄に仕へ。我迎も主
 従なりしが。時代とて今其方は横山に奉公し。遠路の所檢使の役。老の身の太義なれど。地挨拶有ど馬の耳。餘所に
 開捨。詞サア／由良之助。亥の刻限りとの仰切腹の用意は宜か。少しでも刻限違へば。主人へ申譯がないぞ。イヤ
 そりや御自分の云迄もない。刻限違へば。某が命賭。件漸只今入相。亥の刻迄は未だ二時。實て此世の御名残一
 指の扇の手。御筐共存れば。拜見を致し度某が願ひ。地老人の氣を焦らずと。此方にも見物召れ。詞ホウ日比か

ら遊藝亂舞。四季の草花小鳥好。慰計に虚々と浮世知らずの鈍間殿。此長監は武道忠義。國の政道公事ごとに氣を
 苛を言上り。暇を取て横山殿を御主人と頼んだも。埒明ずの其方と。不中に有た故じやはい。切腹の場で舞謡。白痴
 らしいと思へ共。醫者の放した病人に。好きな物喰す心。地舞なりと輕業なりとフシ勝手に仕やれと憎て口。地衆家
 餘所に閒流し。詞イヤナウ由良之助。一學が一指を此世の簞と望るゝは。本望と云ながら。地踏途定めぬ目病の舞。
 見苦しくも可笑からん。詞ア、是はく勿體ない。日比お好の忠度の舞。お相手は兄弟が鼓。是非に一曲遊はしませと。
 地強て望ば詮方なく。最悠然に立上り。監年は壽永の秋の比。都を出し時なれば。然も聞はしかりし身の。く。心
 の花が蘭菊の。狐川より引返し。俊成の家に行歌の望を敷しに。望足ぬれば。又弓箭に關係て。西海の浪の上。暫し
 と頼む須磨の浦。源氏の住家。平家の爲は由なしと知ざりけるぞ果敢き。詞イヤく最早舞た同然。ナウお石。兄弟
 の鼓を聞も今宵限り。冥途への土産と思ひ。一學が望むぞやと。地宜ふ内に由良之助扇を筆にさらく。と。疊に書を
 吞込で一學殿の御手を取。何か耳語點頭て。無理に一間へ押遣りく。フシ手早に櫛引立る。詞是はマア有難い御所望
 ソレく早ふと地父が目睫。二挺の鼓携へて。直る床几の相引より心の短合云合せ。地蔭に弟が大鼓肩に力彌が小
 鼓の梅の花形兄甲斐に。最期の差圖三方に。乗地結ぶ地水の劍。見て見ぬ母の忍び泣。紛らす父が諺と掛聲打上の。
 頭を打ば女房が。待ふ笛の歌口に思ひ暗める。フシ涙の海。地去程に一の谷の合戦今は斯よと見えし程に。皆ふ船に取
 乗て海上に浮ぶ。詞我も船に乗ん逆。汀の方に打出しに後を見れば。武藏の國の住人に。岡部の六彌太忠澄と名乗て。
 六七騎にて追駈たり。是こそ望む所よと思ひ。駒の手綱を引返せば。六彌太頼て無手と組。兩馬が間に撞と落。彼六
 彌太を取て押へ。既に刀に手を掛しに。六彌太が郎等。御後より立廻り。上に在す忠度の。右の腕を討落せば。左の
 御手にて六彌太を取て投退今は叶はじと思召て。其所退給へんや。西拜まんとの給ひて。光明遍照十方世界念佛
 衆生攝取不捨との給ひし御聲の下よりも。勞敷や敢なくも。六彌太太刀を拔持て終に御首を打落す。詞ハ、ア見事見

事。出来た〜地と長監が。響るに驚きお石は差寄。詞イヤ申し長監様。出来たとは謠か。イヤ謠でない。誠に。弟が由々敷い切腹に。兄が立派な介錯と。地云ふに力彌は悔り顔。詞夫んなら此方は目が見えるか。ヲ、蟻の這迄見透眼と。地聞て扱こそ一世の大事と。母諸共に詰寄ば。長監は涙を浮め。詞へツエ左程迄此長監を。放逸無慙の人でなしと思するか。元來我慢性急は我生質温和なる由良の助と。自然と不中になつた。蘭相如を猜たる。廉頗が無骨に相同じ。上役と尊む事。むやくしと心の僻。國を去て鎌倉に暮す中。横山が我儘非道。御主人との遺恨と成。折悪く御短慮にて。御生害と聞しより。地御主人の仇横山を。近寄て刺殺さんと。望んで奉公に出たれ共。新參と云ひ小栗家に。勤し者と用心深く。近寄ねば力なく。詞漸山形兵衛に詔ひ。此檢使を願しに。役儀首尾能動なば。近習になさんと約束にて。今日當所へ着の砌。由良の助に對談し。御身代を兎や角と。思ひ付しが。ア、イヤ〜。日頃不中の我檢使。身代食せ出拔んと。意地を力に最愛子を。討れもせふ切れもせふ。なまなかま中此方から打出して。身代を相談せば。地何程忠義の由良殿も只た二人の子供の中。兄に仕ふか弟かと。心迷ひと恩愛に。フシ若や不憫の未練や有んと。思ふ餘りの惡人方。雀目と云しも身代に。心遣ひをさせまいと。我存念は屈きしが。地年端も行ぬ兄弟が武士の胤とて。潔く。討も討たり討れも討れたり。傍て見て居る親の身は噂嬉しかる悲しかる。臣下の身程世の中に苦辛物が有ふかと。日比の我慢引替て洩す涙の村時雨。フシ晴間も。無げに見へければ。お石はわつと泣沈み。一學様のお爲と云檢使のお前に心を隔。我を張合に悲しさもじつと堪て居た物を。お前の切なるお心を聞て不便の親心。我も張弓も折果て死だとは思ひませぬ。矢張傍て微笑〜と鼓打のを見る様な。思ひ廻せば不便やな持て生た其身の壽命。此子が遙稚い時。お乳やめのとと遊中。力彌の乳母は育自慢。兄様は百握り。八十八の長生と。云を羨む子心に。此方侍の子じや依て。弓箭筋が有はいと。願是も無しひけらかし。母が胸には急度立。ア、氣遣やと思ふ中。幸と鼓の稽古兄は小鼓此子には。大鼓を打しても手を損ふて手の筋の。切る様にと氣を配り。育た甲斐も情

なや。死だ跡でも此鼓誰にも遺なと頼んだは母へ記念を残したかと。死骸の上に伏轉び。フシ消入絶入敷くにぞ。地力
 彌も不便の目を潤まし。詞ヤア長監殿の御心底。若殿へ申上げ。卒御對面させませんと。地悄々立て奥の間へ。涙隠
 にし入にけり。地由良之助目を 蹠き。詞眼病と有長監殿。雀目にて無き事は。曇ぬ瞳で知たりしが。俱に忠義の御
 心底。地此上何か心を置んと腰の指添拔し。詞是こそは我君の。怒に此世を去給ふ。御切腹の九寸五分。地生血は
 直に我君ぞと。見せるも見るも齒を切嚙。身を震して無念泣。一度に涙班々々。照日の前に白雨の。フシ車軸をなす
 が如くなり。地由良之助は亡君の。在が如く又に向ひ。詞へツエ嘸御無念にござりませふ。玉たる峰の劔なくて。討
 洩し給ふ共。臣下の劔にて今の間に。御本意遂させ奉らんと。地誓に詠する一首の歌。詞思ひ入る身は武藏野の夕
 露の。残る心は朝の下草。地と吟じて鞘に納れば。長監も勇をなし。詞ホワヲ頼母敷し。合體の人数を談合。斯ま
 て堅る其義心。仕損じは苟も有まじ。萬一武運拙くて。本意を達し給はずば。後詰には此長監。地先夫迄は横山方。
 役目を勤歸らんと。振袖切て押包。首に名残はお石が涙。暫しと寄を由良之助。制止て後なる。襖さらりと開放せ
 ば。眞中に亡君の御位牌を備置。岡野金平不破數馬。堀江彌五郎同苗安八。矢間十次郎大驚傳五。木村岡平谷水藤藏
 村井喜兵衛千崎與五郎。白無垢淺黄上下にて。居並ぶ勇士十人の。フシ殿原とこそ見へにけれ。地皆夫々に長監へ。
 挨拶式禮有中に。由良之助は庭に下り。花壇の菊をませながら。押切く抱來り。詞ノウく方々。菊の五色に名を
 付けて。拵置たいろは歌。一首く讀に及ばず。地皆付札に印あり。則ち役割袖印と。分て與へし金の短冊翻讀とし
 て花鮮なり。早時過て晨近き風に連。フシたる攻太鼓。地人々激と驚けば。長監少とも騒色なく。あれは必定山形が城
 受取の相圖ならんと。地云に氣の付由良之助。ヤアく傳五。詞云付置し用意の馬。早ふくと呼はれば。地ハツト
 答て鬼鹿毛に。御舍弟を乗奉り。其身も支度の旅出立。力彌も俱に御見送。フシ轡に引添乗立。地夙赤穂寺の明の
 鐘。六つを限りに見へ出す雀目。一學殿は馬上より責ては一目大次郎の。首に名残のフシ御涙。地由良之助は聲勵し。

詞君に捧し家來の命。暫時の遲速を何歎かん。地殿は藝州嚴嶋。御家門の社家方に。暫時忍んで時節を御待。追付敵を討取て。御愁眉を開かせ申さん。夜明も近し去來くと馬に引添十人の。殿原俱に出行名殘。親子は一世偽首級を檢使の役と長監が。持手に係る力彌が涙。泣ぬ色目の由良之助。我も是より山形へ城を渡しに同道と。云も我子を葬禮の。供よ送りよ道邊を。見送る涙行涙。兄もお石も悲しさに。力亡骸撞抱歩む足さへ跡へ引。歎は一つ二思ひ何時か我子に追手の門。泣々別れ。三重行末は

七 冊 目

地三味はちりく日もちりく。碓の拍子土俵入。括り枕の丸裸。ちりく縮緬切立を。襦袢と湯具に染分て。赤と素人で行ぬ事柄と。笑ひをフシ花相撲。地牽頭の伊吉が行司役。詞お輕様此團扇借ます。サア仲居衆並んだ並んだ。西は寄方勸進元。東西く此所で取せまするが。ア否合せまするが。祇園町で派利の中居衆。西は音羽の瀧おとは殿。東は萬年くお龍殿。サアく。双方顔を見合して。笑ふまいく油斷せまい。ヤツト云が勝負じゃ。ハエイく。エイ。おつと下じや引張まいく。ヲツトく東が勝てござります。東西く。只今のことぐり負てござります。ヲ、云やいな。何處に私がこそぐつたへ。ヲツト論は跡で。今度はお菊どんに小りんどん。サアくよいか。西は菓子の中にある小りんどんく。東は氣轉きくどんく。靜にく笑ふまいく。何ぼ轉でも。頭に砂の氣遣ひと。取て投れて難波へ行氣遣ひない。ぐつと身入て頼ます。ヲツトはたけまい見へるぞく。ヲツトく。こりや双方破てござります。東西々々。此勝負は明日山行靈山で取します。へ、へ、へ。サアく今度高調子。三の糸さん先斗町。興も興がる大騒。フシ一座も興に入相時。地お輕は勝手へ氣を付て。寒からふ中居衆ソ

レ風引ぬやう早ふ着て下んせ。今夜は霜月七夜待。内方にもお客があらふ。一ツ飲でからいにへ。ホンニ廿六夜のお
 備をと。自身に立つ三方にフシ瓶子土器川原の座敷。月を拜むに勝手よき東の山に燃す火も。フシ霜夜はいと物澄て
 調ヲ、寒やの風引ぬやう此羽織を、地似合ましたと伊吉が指出。調イヤ申才兵衛さんお前も何ぞなされぬか。手そゝ
 振計して。いつ見ても百に四文の目をたして取ても足ぬお産付。お輕さんお前の爲には。サア逃れぬお人で手代分やら
 側へ置いて何かの小用を。ハテ。ナアいかいお世話でござりましよ。ヤちつと酒を參らぬか。臍を抱へるはたへでもしろり
 くわんと見張てじや。ドレお盃。私が拾ひます。地手酌でやろとつぐ盃。才兵衛引ツ取ぐつとほし。扱もうましと
 舌打し。燗鍋片手に根蓋提て勝手へこそくく。伊吉はあきれコリヤどふじやと。鳶に看を取られし如く。やつぱり
 此方が甘いじや。ハ、ハ、ハ。中居衆々々是から扇九へ押かけて。地吞や調や一寸先はやくたいじや。拍子コウケンタチ
 シツチャカトコシ。フイくワイトサ。地折節中居が申しく。調旦那様が見へたぞへ。私等は往のと地打通て。去る
 と來ると。摺違ひ。地扇撥々九左衛門。跡には肝煎可中の長兵衛。是は能こそ此方へと。挨拶計蒲團の上。銀の煙管
 に煙草盆。サアお上りフシと指出す。調ボヲ伊吉殿色が能の。マアく下にく。ナニ長兵衛殿。扱貴様の世話でアノお
 輕入込だは跡の月。がらり百兩手渡して判も濟だか。所て其儘差紙も出した。ソリヤ大坂の春日屋のお堀。爰へ出
 たはと。方々から呼に來るか。此方もお梅と談合して衣裳を切込。胡麻の劫に唇を出して日も改め。サア出すはと云
 所て。少と望も有程に。どふぞ二十日か三十日出る事を延して呉。夫んだい百兩の内五拾兩預ますと涙翻しての
 顔。此方ものはづんだ奉公人最先是悪けれど。是非もなふ待て遣つた。モウ四五日で三十日。其方等の用も仕廻なら。
 約束の通り出て貰ふて思ふて。預つた五拾兩持て來た。コレ長兵衛。貴様の苗氏可中じやが。何と面長な了簡て有うが
 の。餘の親方なら。何として三日も待まい。扇九ならこそ看々の金儲。金出しながら過ばすとは。餘程吾も可中じやない
 が。扱もく。えらじやく。お前の詞に乗が來て申すじやないが。夫りや最ふく外ではいつかな出來ぬ事。イヤ

ハヤ強い御了簡。ナニお輕様。そしてマア其方の用事は何ふてごんす。大概に仕廻なら明日からでも。ナア申し。親方様に了簡有ば。又此方らにも了簡つく。畢竟物は當て碎けじや。ノウ伊吉殿。イヤ最ふ頓と圖のない事。お輕様も了簡して何と出る氣は。有るともく。勤せふと思やこそ身を賣たじやないかへ。親方様氣遣して下さんな。三十日際貰ふた代。三十日宛上詰に居て見せやんしよ。大坂に居た時は月から月まで。賣詰て。毎日衣裳も着替た故先へ衣厨で持して往た。花じやのイヤ揚前のと。餘のお方には有るけれど。私は是迄遂しか知らぬ。斯云ば如何やらしいが。大坂からござんした牽頭様や法師様に聞てお呉ア、太氣が盡た。伊吉様仲居衆は皆去てか。はつたりと銚子直して下さんせ。地皆にも一つと大様に。煙輪を吹く全盛は。苦界にフシ稀な女子なり。地親方可中は氣を吞れ。開たる口臺所。其間に伊吉が以前の銚子。有へ掛りの精進肴。御亭主役にお輕様。そんななら私と丁ど受。親方様上ませふ。肴はなくと。イヤモ何方も六夜待精細豆腐で飲ませぬ。飲ぬ所を押へた物。肴は私が着て居る羽織。地お前に脱して貰ひたい。調アノ此扇九に。サア早ふ。然らば頂戴月行司。伊吉は扇九の此羽織直に頂戴鏡立。姿見交す太鼓持。金持鑢持すつゝ。有難の影向や。月待日待。果報は寢て待酒盛じやと。譚立たる牽頭く。可中は下戸のフシ伸欠。調扇九様去まいか。ヲ、夫々。ヤア肝心の五拾兩。念の爲じや受取を。ア、否々。此長兵衛が見て居るかは。何の夫にも及びませぬ。ヲ、夫も左様じや。コレ篤くりと改めて置ましたと手に渡し。可中殿同道せふ。ヤレヤレ長居を仕た事じやノウ伊吉。ハイ拙等も矢張可中じやと。笑ふて出る折も折。地十二三なる小丁稚に。挑灯持せ急促と。跡から行くも鈍か敷。心苛曲五調作り。切戸口より指覗。調少物尋ましよ。大坂から見えたお輕殿共云ふ。お輕殿共云人の所は愛かなと。地音信ふ聲に主のお輕。聞た様なと出向ひ。調是は野間屋の久兵衛様能こそお登なされました。忠吉もお出つたか珍しやく。挑灯消てマア是へと。地はたゞ云ふも家主だけ。上座へ直し。フシ待遇ふ。調ア、コレく何も構ふて下さんな。今朝三條の出店へ着て支度は能ござる。叔と堂島の貸屋に置た時から心安

ふ世話にした兄弟の衆。兄貴は遠へ掛に行れる。こなたは島の内へ身を賣。此忠吉は此方へ取。ヲ、夫よ。隣に居た長七の息子。親父が死ると氣付に成たが。此方が連行て世話にするとの事。少々本性に成たかの。イエ／＼矢張同じ事。寢て計居られます。ムン夫は奇特に能ふ世話。イヤ最ふ私が得心の事なり。別に世話といふ事も。ホンニ忠吉大分背も延た。随分と旦那様を大事に。御奉公申て給と。地云へど返事も差伏向。諸は涙計なり。調イヤコレ姉。今の名は矢張お輕か。逢に來たも外じやない。アノ忠吉を戻しに來た受取て貰たい。エ、イ何と仰しやります。アノ弟を私へ。ヲ、受取て下され戻します。ハイそりや兄弟の事なり受取まいては無けれ共。如何も合點が参りませぬ。コレ忠吉。扱は不奉公仕やつたの。其方も十三成りや一向の子供じやないぞや。アノ結構な親方様。少々事なら冷る時分に京三界。大抵の事では有まい。コリヤ大方盗心でも出來たのじやわいの。ア、コレ／＼忠吉に限て微塵毛頭仕落はない。知ての通の質商賣。人手も入丁稚も多い。取分彼は綿密者。夜業の師匠を取毎晩／＼精も出し。文章金目も餘程上た器用者。一事が萬事と何から何迄仕落はなけれど。其方と云兄弟を持たが忠吉が不仕合。隙遣は惜けれど。後々姉に係つて彼が身のひしに成が不便さ。夫で通て登つたのじや。隙遣からは元の他人。モウ吾や去ると立上る。マア／＼待て下さりませ。スリヤ私と兄弟故彼にお隙を。ヲ、其通り。マア／＼暫く待て下さりませ。夫なら私が身の上を何ぞお聞なされまして。ヲ、てや。三條に店が有故毎日の狀通。此邊の事も其方の身持ちも居ながらに聞はいの。今門口で一寸逢た肝煎の長兵衛。大坂では此方へも入込委細の咄。百兩に身を賣て親方の勤はせず。毎日毎晩人を寄咄波嗟波と大騒。女の有まいよい衆の眞似。座敷の宿代難用迄内て算用して見れば。モウ／＼針を藏に積ても足ぬ。兄は遠いへ行る。怖者なし高なしの我儘。仕廻は何ふて盗か。拘盜か尋常な者には成まいと内に居る空もせなんだ。忠吉めも小耳に聞て氣の毒な顔付。汝も此方には置ぬ通て登ると云たら。夜船中泣て計居つた。コリヤヤイ泣て計居ずと聞た通を其處へ云やい。扱も／＼聞たより登て見て。興の冷た此生業と。地齒に衣フン着ず云立る。

地涙拭ふて忠吉が何思ひけん有合筈。取より早くお輕が背。打振く。詞コレ姉様。旦那様の今仰しやる事何故言
 譯を仕成れぬ。言譯の無いのは覺えが有のか。エ、此方様はく胴欲な人じやなふ。姉様が悪い故追出すと仰しや
 る。お家様や手代衆を頼てん佗言をして貰ても。何ふても置ぬ。姉めに手渡しして来る迎。亙てお出成れたはいの。こ
 な様に佗言して貰をと思ふて居たに。エ、く。如何な事じや。地吾や矢張行て奉公が仕たい。旦那様の供して行たい
 行たい。姉様と子供心の。一途には只辨も泣計。お輕は始終伏向て物をも言ず居たりしが涙隠して。詞ヲ、忠吉尤
 じや。行たいは道理じやく。申し旦那様。段々のお腹立。忠吉がお佗より我身の申譯。地慮外ながら暫の内。アノ
 次の間へお立成れて。地下さりませ。詞ヤア何じや申譯。アイ。ムウ其云譯爰て聞ふはい。地サア如何も爰ては。詞ハ
 テ六か敷云譯じやな。ハイ。地お腹立も鎮まし其上て弟がお佗も申し。又お頼申さねばならぬ品。自由ながら暫の内。
 詞忠吉お供申して給いなう。ムウ今言れずば待て遣る。忠吉來いと。地主従が立行跡の唐紙を。立切く。傍を見廻
 し。二階へ報す鈴の音。フシ相圖と聞より段々梯子。下来る男が唐犬額。頭は毛毬栗蜻蛉の八。五下の青二に鬼の市。
 突元立たは枯野の薄。詞お輕様ア、窮屈な目をして居たシテ呼んしたのは。シイく高いく。高は斯じや。爰は親
 方扇九様や肝煎が宵から見へて。約束の三十日の今明日じや。早ふ勤に出て吳と責叱に見へた。スリヤ此座敷も聞ね
 ば成らぬ。其上大坂から私が弟や旦那が見へて。私が身持の意見と詮議。事に密たら打明て有様に言ずは成まい。顔
 合はして六か敷。左様じやに依て。ア、聞へた。此市は疝氣で働きにも出ず。太厄介に成まして。コリヤ五下よとん
 ぽよ盆を替ずば成まいぞよ。ヲ、左ふせふく。シタガ何にも帳符の出入もなし。更ぬ内に行うかい。ヲ、そふせふ
 と立上る。コレ待んせ。出立でも拵へて進ぜたい物なれば。取込込事も有勝手て酒なと。ア、否々。賭場か葛藤噺で
 は咽の穴迄塞つた。更ね先に。そんならござるか。ソレ錢別。ヤアコリヤ小判じや。地。忝いと三人が各手に戴き。
 詞お輕様お前の仕廻は如何さんす。ハテ尻が來迄爰に居る。隨分と息災で。アイ。去らば。地くくとのつかのか

己が様々 フシ出て行。地跡打眺め打眺。地棄て覺悟は仕ながらも冷つと怖さと悲しさと。面目なさに フシ鈍々と。襖細めに。詞コレ忠吉。旦那様をと呼中に。肝を冷せし久兵衛が顔に立て出る。跡から恐怖忠吉も。フシ隅々を見る計なり。地お輕は會釋給繕ひ。詞無待遠にござりましょ。只今歸した三人は。前に大坂でふとした事の間違から近付に成た衆。此座敷へ付込て隠匿て吳との頼み。私も何かの工面にて金の入事も有。道成らぬとは知りながら。地是非無ふ仲間の分口をと。聞より忠吉親方の脇指抜取給押明自害と見ゆれば久兵衛お輕。詞コレヤ何て死ぬ何故と。地捨放せば。イヤ。詞盗人の姉持て旦那様へ立ぬ。地死る。と取付を。漸引分。詞コレヤ忠吉。出来た出来た。左様無ては成ぬ所じや。汝が道理じや尤じや。此久兵衛が留るからはモ、堪へい。合點か。得心が行か。雅ふても 通男じや出来た。エ、同じ腹から出ても。此様に性根が違ふ物か。畜生も畜生大畜生大盗人じや。此方の借家に居る時からじやと噂は有どな。忠吉が知る通。齒端へも出さずに居たはい。榮耀はたへもする筈じや。人の財寶を盗んでするのじや物出来いじやい。ヤレ恐ろしや。と。地双物を韃に納る久兵衛。忠吉猶も恨めし氣に。詞姉様おれに勘當をして下され。兄弟でも無けりや旦那様疑ひも晴るなりや矢張お供して行たい。コレ物を言しやれ姉様と。地云れて何と返答も愁氣苦しさ。恥しさ思案途方に暮居たる。地久兵衛點頭。詞そふじや。味やつた。追は小切米も取た物の胤じやなア。勘當とは能言た。コリヤお輕能聞け。吾が所へ世話にする忠吉が姉の事じやと思ふて。入ざる事息精張て云も外じやない。天満の老松町に跡の月迄。寺子屋して居られた人體の能浪人衆が此方へ見へて。是の貸家に居ました。平右衛門や長七義は。如何でござると問れた故。二人ながら先斯々でござると。有の儘に云ふたれば。其人が云れるには。夫は甚お世話でござる。深切にして遣て下さつた故有様に申すと。己が耳に口寄て。私が本名は原郷右衛門と申す。是より京都へ引越ますと。段々禮を云て行れた。其時聞た八藤長七平右衛門の身の上。ア、侍は堅い物じや。臂の通喰ねど高楊枝と。終にそんな顔もせず。平右衛門の旅立も侍の心掛尤な事。又本望

も遂す病死した長七。嘸無念口惜かと思ふて。忠吉が知て居る。福島ふくしまの淨祐寺へ。石塔せきだふも立て遣た此久兵衛。恰は質屋しやうやの商賣納。人の爲に善事なら。錢金入ても世話する氣じや。夫にマア大怖た。兄や弟に生れ劣た其心底。此上は何にも言ぬ随分人に疎れぬ様。ア、是も入ぬ事。更ぬ先にモウ行ふと。地身拵する其手を取。詞マアく待て下されませ。エ、汚はしい何留立。何にも言まい聞事ないと。地振切行を縄留。御心底を聞上は私が心も打明て。申上ねば歸しませぬ。詞マアまだ何者をか隠して有か。長居仕たら此上に何様者が出よふも知まい。イヤくお際は取ませぬと。地留る片手を出す文箱。中を見て下されませ。詞ムウ此申を已に見いアイ披て見て下されませ。ホウ直な者じや有まいと。地云つゝ紐の結はふれ不審ながら解ほどき。灯陰に透し。詞ハテ多數狀が有な。何じや無事息災は知た文言。何々一其方より受取候五拾兩の金子の内六兩。鎌倉へ着候節。逗留の間宿賃雜用身の廻りの拵。又宜しき刀一腰求申候。一貳拾五兩三步鎌倉に於て件の屋敷へ入り込み度。件のやしきに入込度。出入の町人を相頼段々付届け致候所。首尾も能く近々に入り込む筈に極り申候。是れは件の顔を見知申爲めに御座候。跡より便宜に報可申候。月日。お輕殿へ平右衛門。又一通。先達ての狀届申すべくと存候。彌首尾能件の屋敷へ草履取奉公に有付申候間安堵致さるべく候。其の砌早野勘平と申古傍輩も入込名乗合申候。残り候金子の義此地に於いて諸傍輩の方々。浪々の暮見捨難く。壹兩貳兩或は三兩。又は貳歩三步取替に入申候。右の人数名は都度く申難く候以上。宛名はお輕殿平右衛門。ムウ扱は兄貴は鎌倉にじやな。アイ兄様の狀お見知がござりませふ。未だ跡にもござります。讀て見て下されませ。ア否々目が翳かぶんで怪つく。跡は此方讀て聞して下され。地ハイ夫なら左様と取上て。讀も實ては云譯と。上る痞を押鎖。詞幸便に由り一筆令啓上候。爰らは堅い返字計り。ナニく十月十日の文拜見致し候。母人も御息災に御入の由悦び入申候。其元事京都へ賣替の相談極候由。扱々最愛き事に候。是迄の勤さへ無念なる事に候へ共。ケ様成時節と申し其元身を捨候情に由り。望も叶ひ奉公に有付候所に又々高金に賣替。其内五拾兩下し下され體に受取申候。一

所に暮し候節には。女は主の役にも立ぬと澤山に呵り申候事。今では恥しく存じ是のみ悔居申候。只今の忠義兄に勝り候。嗚々冥途の主人も草葉の陰より御満足に思召候はんと押量り申候。此上ながら身の勞煩墮ぬ様に頼入候。委細は跡より先は禮の爲に。エ、何の勿體ない。兄様に禮を受けては私に罰が當るはいな勿體ない。勿體ない。と。地涙吞込フシ。と。調禮の爲又は金子の受取ながら申入候。一八藤與茂七事其元に未だ介抱の由神妙の事に候。何卒藥祈禱を以て本復致させ一味連判にも加へ。又は自身本望も遂させ度願ふ事に候。エ、嬉しや夫程に思ふて下さんすか。エ、兄様忝ふござんする。一與茂七の父長七菩提の爲。藤澤寺へ日牌料右の内にて上申候。テモマア兄様の情しい能心が付ました。長七様があゝの世から守つてゝ有ふ物。地嬉しうござんす兄上と。涙も文も繰返し繰返し。調何事も大切なる御主人の爲と思召辛抱第一に候。猶々弟忠吉事野間屋殿御世話と存候。禮狀は重て遣し可申候。宜しく。地御傳と讀殘て我身に係る憂涙。フシ止兼てぞ見えにけり。地久兵衛は目を瞋き。調コレお輕おかる殿。モウ。何にも言ませぬ是で知た。スリヤお疑は。ヲ、晴ました。町人の妻しい心に引競。云た事が吾や恥かしいわいの。侍の胤と云物は。何程女子に生れても。其様に迄お主の事を思ふ者か先刻からの無禮は赦して下され。コレハ。勿體ない事を仰しやります。元來勤に出る時も本性の與茂七様なりや。斯くてござんすと得心づくで爲る勤。何を云ても現なお人故。譯は云れず。我身で買て居ましたも。本性成ぬ與茂七様へ。私が心の云譯でござります。又近所隣も憚ず。踊たり舞たり人客をして騒たも。鎌倉へ貢ぐ金。入端を知らすまい悟られまいと思ふから。地身の榮輝奢と見せ。呑度ふも無い酒も忠義じや物とは一つ呑。兄親へ孝行に成物と。呑度々の節なさは天狗道は知らね共。其熱湯も此様な。物で有ふと堪忍して。今日の今迄ラシ堪へしぞや。地先刻にも忠吉に盜かやきと此口から。云たも誠は此事を包隠そふ其爲じや。旦那様の志。兄様の身の上や。長七様の石塔まで。建たと仰しやる御深切。忝いやら嬉しさに。大事の事を明します。何事も了簡して。忠吉の而倒を見て。お遣成れて下さり

ませ。詞コレ能擲て給つた。勘當せいとは能云やつた。死なふとまで仕やつたも。嗚此姉が憎かつたて有ふなふ。地堪て給と云ければ。忠吉は只疎々。詞夫なら兄様のお主様の爲に彼様な危殆事迄して。金を取つしやつたも兄様へ遣爲て有たか。地左右とは知らいで擲ました。姉様免して下さんせ。イヤ／＼。神様や佛様が擲しやんした物て有ろ。何の赦すの赦さぬのと。イエ／＼夫ても勿體ない。地イヤ／＼私がと兄弟が。心の内も解合。涙にフシ親身を顯せり。地久兵衛も心解。詞吾も鼻負に思ふ小栗様の御家來衆。押上る様に思ふから惡體も云ました。ホンニ夫よ忘れて居た。爰に居らるゝ與茂七本性にして遣度物じやが。サア私も如在なふ。母様迄が精出して方々へ願參り。加持祈禱を誂へて。ヲ、本復を知られたら鎌倉へ遣たかる。此方へ賀に取た腹巻も欲かる。出店へ登して置程に取に行しやれ只進せる。コレ忠吉も連て行ぬ。エ、ヲ、サ此久兵衛が養子にして。野間屋の跡式譲ります。兄貴の方へも其通を。アイ夫は段々お志。忠吉お禮申しやいの。ア、何の／＼。未だ云ましよ。貢の金も入る程に何程成と遠慮なし。出店まで直狀で。アイ／＼。お有難うござります。どふもお禮の詞さへ。ナンノイノ。禮を請きよ迎來やせぬと。地誠同士の挨拶も稍時フシ移る小夜嵐。地河原を傳ひ来る侍。捕手と思しき供廻り。戸口に耳密打點頭。聲を斷續て誰を頼ふ。お輕／＼と呼聲に。内にも夫と答る胸。アイ／＼其處へと立上り。私は鳥渡と言捨て。フシ降来る間も手天風粘殘ふ。戸口へ出るお輕。女盗人遁さぬと。早瀬輪巻括り上げ。サア／＼來いと引立て。地後へ密と久兵衛が。透し詠で。詞コリヤ何事。お輕覺が。アイ成程。斯成は覺悟でござんす。イヤ申し代官様。科人の今般には一つの望も赦すと聞。心残りは多けれど。ただ一人物得言ぬ病人がござります。暇乞が致したい。地暫の間の了簡をと。打淚含願ふにぞ。詞ヤア何と。此期に及んで未練千萬。ソレ隙さへ入らずは只一目と。詞許す詞も嬉しげに。貴方には暫の内。地ヲ、此所待て遣る。譬遊ても表には身が家來を付置た。詞隨分早くと用捨の詞。久兵衛指寄。お輕待や。此體を忠吉に見せたら又も憫りせう。何卒彼に見せぬ様。吾が羽織を打掛てと。地脱て跡から掛作り。登る

月さへッシ片明り。風が吹消す灯火も。虫が知すか勝手の櫓。明て出たる寢惚顔。其邊胡亂。詞ヤアお輕殿コリ
 ヤ立て踊のか。ハ、ハ、ハ、吾も踊ろか。アレ。三絃彈で騒はく。太鼓はなくと一踊。つゝてんくやつと
 や。松坂越たへ。やつさくも騒がしき。夢を見たのかッシ現や戲意又も轉と正體も泣か。笑ふか隣の座敷。三味の
 音色も寂然に。歌心は眞如の撞鐘を。一つ撞ては。獨涙の雨やさめ。二つ二目と見もせいで。詞寢て居て濟むかい
 な。與茂七様イヤあの才兵衛様。爺御様の死しやんした其日から。私や今に精進して。七夜待を祈たも。其病の直る
 様にと供へたお神酒。ヲ、合點じや。此久兵衛が戴かす。心靜に暇乞。コレ才兵衛も能顔を。歌三つ見れ共片
 思ひ。四つ宵から泣明し。詞まだ其上に私は今。身さへ叶はぬ此禁。何にも知らずに夢現。歌五つ命が續く計で。六
 つ報いは何の咎ぞ。詞彼御病氣。私や餘所へ行はいな。賣て一口さらば共。言れぬ事が最愛やなふ。歌七つ涙で。八
 つや聲の。詞鶴迄も。詞鳴音に連て。九つ心で暇乞。地耳に入てや起上り。詞何邊へ行のじや吾も行ふ。ア、否申し
 少と餘所へ参ります。アノ吾を置いてや。ア、エ、おりや今夜から誰と寢よ。早ふ戻つて下んせや。アイ。く。戻
 りたいは山々でも。私が事は十も語るも。戀し。歌懷數弟が年も。六つと七つと十三鐘の。歌の唱歌を身の上に。
 可愛く。と友泣に。泣は冥途のッシ鳥ならで。地捕手の武士が毎の間に時刻移るとッシ引立ち。拍子に脱る羽織の下。
 細目を見ける忠吉が。詞コリヤ姉様が縛つて有。地悲しやなふと取付て細敷くを踏飛し。行いくと。強く。引る
 るお輕が聲涙さらばくも夜半の霜置別れてぞ。三更出て行。地川原を北へ傳ひ道。月も囀の星明り。流るゝ水も。
 音澄て。ッシ一つ所に寄集り。地互に顔を見合て。詞美味と首尾能。親人勲。出來たくと打笑ふ。地聲に恠り驚く
 お輕。詞奴は代官と見せたのは。ヲ、嘘じや。エ、イ。ヲ、嘘も嘘盗人じや。エ、イそしてまあコリヤ何方へ。ヲ、
 何處と云たらナア軍兵衛。京中では捌口が。サア言合せた近江の内。野上の宿か鏡の宿へ。賣て遣了簡じやと。地聞よ
 り澄と氣も消々。詞コリヤマア如何とせう。エ、く。左様と知たら來まい物。欺されて此細目。地情なや悲しやと。

立たり居たり身を悶。フシ悔涙ぞ道理なる。詞エ、姦いおと骨。ソレ轡を咄して引立。ヲ、合點と立寄は。マア
 マア待て下さんせ。成程覺悟さへすりや子供じやなし。夫には及ばぬ一口云度事有。コレ私や百兩に身を賣て勤
 に出る約束なりや。親方様が聞付て其儘にしては置まいぞや。マア後先を満分と。ヲ、夫も知て居る。今直に高ぶけり。
 又能金にする工面じや。エ、細言云間に夜が更る。地サア行うと軍兵衛が。引立掛れば。マアく待しやんせ。詞今
 云通何國へ往ても其譯を。云たらしんどが無益働。イヤ夫云して宜物か。サア夫じやに依て私が身を了簡さへして下さ
 んすりや。此肌に五拾兩。ヤア何と云肌に金が。ナウ親人。夫なら夫から掠奪て仕まへ。地ヲ、合點とフシ立寄所へ。
 地急促走て九左衛門。詞お輕じやないか。ヤア扇九様か。能マアござつて下さんした。ヲ、嬉しや。ヲ、サく
 月を拜に座敷へ行たりや。残つた衆が泣て居る。様子を聞と匪付た。サアく戻りやと縛繩。地解手を軍兵衛が。鄰
 退。詞コリヤ素町人め何ひろぐ。ハ、ハ、ハ、是りや此方の奉公人。夫て連て行やんす。ヤア吐すな。此女めは。盜賊の荷
 擔人。訴人が報と云せも立ず。アイ表向の科人なら。此親方へ祟が来る筈。年中それやをして居るから。前々先見いで成
 物か。玉の上つた強説事。代物さへ取返しや。言分ないサア。行しやれ。此奴法外者。打挫て仕廻と下知の下。
 地源八田邊が立掛り。中に取り籠踏つ蹴つ。フシ呵責後へ。地來掛る忍びの侍が。物をも言ず片端。踏倒し踏飛せば。
 お輕が嬉しさ誰人共。フシ心不審計なり。地中にも我武者の軍兵衛が。汝奴何奴と寄所。ぐつと引寄踏倒し。足下
 に引數後から。コリヤさせぬはと取付腕首。捻上く引廻し。頭巾を脱たる顔と顔。ヤア原郷右衛門か。斧九太夫。
 南無三許せと遊行脊骨。拔手も見せぬ斜袈裟。返す刀に軍兵衛を向袈裟に。フシ討放せば。地二人が左右に聲を掛。郷
 右衛門久しいな。玉水源八田邊嘉兵衛。當座の敵と討て来る。刀を洗んで身を開き。拂ふ刀に玉水が。高股突れて片
 影く。田邊が受太刀疊掛。厥く所を膺入て。即座に仕留る捷業早速。手練のフシ程ぞ潔き。地傍に隠れて九
 左衛門。お輕が細目解放。詞申貴方にお怪我でもア、否を身共に氣遣ひ無用。扱をあぶないお輕の身の上。先程

より忍來て。様子有増聞た。ナニお輕の方親扇九とやら。前以て聞及ぶ。古傍輩由良之助。今山科に蟄居して。折々の靜散に其方へ越る。噂。某迎も先々月。大坂表を引越して。只今は當所の住居。お輕の事も兼て聞。親方隨分いたはつて。ナ合點かと詞の中。地取分お輕が嬉しさに。詞アノ申し貴方の噂も大坂の久兵衛様に。ヲ、いかにも。夫は野間屋の久兵衛殿。町人ながら町騒人。夫に引替人非人。欲類の此が太夫。此比京大坂で多くの人勾引の流行たも。皆此奴等が爲した業。國許の町人に恥類掛され迷廻り。未大欲が仕足いて。アノお輕まで盗出し。又賣せふとは笑太い奴。苦痛させん其爲に。態と薄傷飛疵。能も骨肉に對しな。逆礫にも掛べき奴。主君の罰天の罰。能も思ひ知たるか。地指通くずたに切呵責。死骸を残らず。フシ河原の芥。地九左衛門は一禮述。お輕が會釋早瀬川。末は淀川夜明方。萬事は重て。先去らば。お去らばさらばも。横雲や引別れてぞ。三重

八 冊 目

呷足音高く聲空嗟て。大門未だ鎖ずして。茶屋の半蔀。垂の格子。誰じや。羽織被て米口説女郎招く請切横切一つ買笑止。わい／＼のわいとさ。頼もふぞよく。アレ何方やらお客様がお出たぞ。仲居衆く。龜や。誰もないかいのふ。エ是は申し能お出遊したな。ヤお身は此家の花車か。ハイ私は梅と申まして。九左衛門が女房でござります。是は幸。身は黒塚黒右衛門と云者。是に新道源四郎殿が居られるならば。一寸逢たい呼てお呉りやれ。エ源四郎様は今夜は由良の助様の年忘れて。非人敵討の芝居事がござんす故。源四郎様も其役人の内。加村宇田右衛門の役でござります。又由良の助様は次郎右衛門の役。弟新七には下からお出た。私が所の抱のお輕様が。其弟の新七の役にお成なさつてござります。是は宜ろと祇園町中の。怪敷らぬ評判でござんすはいなア。夫は一段。身共も折節は堀町の芝居見物したれば。エ其役者に遣ふてお呉りやるまいか。是は氣疎い。申コレ誰ぞお出や。アイ。是龜且

那殿呼て給も。アイ旦那様。ワイ。く。エ、何の用じや。今由良様の化粧最中じや。吾も身仕廻せねばならぬ。サイナ。其事じやわいな。爰へお出だお客様が。源四郎様に逢に見へたわいな。何ぞ役に遣ふて呉いといな。是は幸。太鼓の大津伊吉が。高市武右衛門の役を拵へいと一遍尋たれば。由良様に例のはせう様に仕付られ。團の間で他愛がない。今大津屋へ太助を呼に遣ろと思ふた處。幸じやお前高市武右衛門の役成されますか。夫は彼大坂で文七が非人を見たが。其時彼エ、夫。常は若男仕たげなが。夫が彼エ、武右衛門の役を仕たが。ア、名は何とやら。ヲ、笑止。夫はな。市野川彦四郎じやはいな。左様だく能仕たてや。其役を己が仕ても大事ないか。己は武道役よりは。其若男が仕たい。今の何だか女郎と手を引合て。團入節か江戸半大夫抔と云様な淨瑠璃を語らせて道行が仕たい。ハ、ハ、ハ、ハ。夫や又跡で指ます。マアく急な武右衛門の役成されませ。夫なら聲音を教て給。サアマアお前の役迄は間が有。コレく此筋書讀で覺なされませ。ム、是を讀で覺るのか。コレ旦那殿。庄之助は。お高様が成んすのかいな。サレハイノ。是も盛潰されて厄怠じやはいな。由良様の茶碗と洋鍾には誰も終向。代が有かへ。誰もない故。是非なふ我等庄之助の役えらいか。ハ、ハ、ハ、ハ。お龜聞きやいのふヲ、笑止。廢止になんせな。デモ代の仕人がない。コレお梅。淨瑠璃は辦善を頼て置たが見えたかの。先刻から小座敷に。三絃連て待てじやわいな。宜々。辦善にモウ遣かけて下されと。龜ちやつと云て行。アイく。ヤ申しお客様。サアお出成されませ。お梅樂屋へ案内仕や。ハイく。斯お出なされませ。亭主來やれ。マアく樂屋へお出なされませ。是から拍子木。東西く。此所非人敵討の始り左様に。地春藤次郎右衛門兄弟は態と非人に奈良坂屋。寒風に身も郡山大安寺の三昧に。藥の假家。假初に二月餘り忍び居て。大和一國端々まで。心を盡し身を碎き。フシ敵を狙ふぞ健氣なる。フシ宵月に梢離れて轉鳴く。浮浪鳥のフシ音に連て。地立歸る新七小屋の藥戸に打咳嗽。詞申々兄者人。ハ、ハ、ハ、ハ。フシ恥かしと袖覆ふ。詞ム、誰じやヲ、可笑。新七でござります歸りました。是は宵から御寢なりましたの。ヲ、日は暮る。只た一人

淋しさに。横に成と思ふたが。モウ何時ぞ。イヤ五つ半四には間が。ござりませぬ。夫ても一時半の上ねた。ドリヤ
 其所へ出て茶を調ておませう。エ私に焚付ましよ。ハテ一日歩いて嘸草臥。釜も風爐も知らぬ所へ直して置た。地身
 が焚付ると立出る。髪は麻に延亂れ。顔は鬚生身は若生。思ひに實る兄弟が。フシ身の形勢ぞ哀なり。石の竈に土の
 釜。落葉枯木を指焚る。竹の火箸の火通して。詞ナント新七。今日は何方を尋てぞ。ハ、ハ、ハ、ア、可笑。ア、コ
 リヤ笑ふなく。アイ木津の方から新在家を心掛。夫て思はず日が暮ました。モウ爰の逗留も二月餘り。ヘエ、今日
 まで有家も知らず。其内萬一敵が病死せば。誰を敵と本意遂ませふぞ。ハ、ハ、ハ、ア、可笑。エ、笑ふな。ハテ氣の
 細い若者。是程兄弟心を碎て。此敵討取せねば。世界に神も佛もないわい。サア如何じや。ソレ臺詞じや。ハ、ハ、
 ハ、夫ても有家が知れぬ者。知たれば云事はない。搔奪様に氣短ふ思ふても。是計は力業には行ぬ。かと云へば
 如何にも討す。ヲ、此由良之助が。ア、イヤ此次郎右衛門が討す。泣な。コリヤやい泣やいのふ。エ、泣眞似せい
 やい。ア、可笑。エ笑はずと泣やい。アイ、斯様かへ。其様じや。泣な虫を鎖めや。コレ茶を飲や。マアお上
 り成されませ。シタガ茶より是を煙して上りませぬか。是とは諸白か。ア、氣が付ました。先お初穂を荒神様へ。ア
 イタ、ハ、ハ。後程寢酒に仕らふ。アイタ、ハ、ハ。申し。痛い。と御意成る。は。お怪我でも仕や成れは
 せぬかへ。イヤ怪我はせぬが。兩足共に腰より下が痛て。身を動せばアイタ、ハ、ハ。按ませう。ヲ、宜ろ。腰の邊
 を揉で給。ア、申し私代ませうかへ。せうさん私が揉わいなア。コリヤせうす酌してお呉。ハイ。又非人の形
 て酒呑のも。氣が換て宜。コレ輕。持參の備前德利。此食碗で輕付さじや。ア、申狂言は最成れぬかいな。ヲ、
 成る共。夫程に成れ度ば彼小屋の内。今夜の契は明日の錦。天晴なる武士じやな。トツテン。ハ、ハ。薦を敷
 寢の假枕。イヨ袖枕。肘枕。ツ、テン。詞は。最前から。最か。と思ふて待合すのに。是は由良殿如何て
 ござるぞ。イヤ源。其形は何じやい。侍が侍の役は。ア、氣が換ぬぞや。イヤコリヤ。高市の役は何者じ

や。イヤ身共は今日爰へ。初て参つた客だ。ハテナ。イヤ申し由良様。其様酒に成るゝと狂言が碎て危意
 危意。コレ輕さん。新七が其處へ出て居ては濟やらぬが。マア何じや有と遣かけふ。コレ申し此方のお客の。高市武
 右衛門の爺様。アノお非人様が明日は丹州へお越ならば。當地の名残も。今宵計なれば。外へお出なさつては。風烈
 しい大事の御身の痛も氣の毒。手前の座敷で幾日も。居續にござりまして。藝子様や女郎様方を揚詰にして。お饗
 應致したうござりますわいの父様。是は何夫成小人。扱々御發明な。其元の御子息な。梅檀の二葉頻伽の明。御成
 人の程が想像る。遭れの能亭主に成れませう。ア、通々。敵を討課せず。返り討に討れましたらば。饅に當り死
 だと思ふて。石塔を立て下されや。小人頼ましたぞや。ア其深切を思へば有難涙が。ヘエ翻れますわいのふ。イヤ敵
 討と云へば。陳の小口も遅るゝ習と。イヤ爰な偽り者めが。見れば刀物帶した物は勿論。小刀一本持もせず。頃哉敵
 に出合した時。何て本意を達するぞ。爰な偽り者めが。ハア、御不審は御尤。斯非人に形粧を更たれば。人の目立
 を憚り。是なる竹杖に仕込罷在。是はコリヤ。脇差がない。アイ竹杖は爰にござりませぬ。エ、忘れた。吾が刀成
 と取て来い。早ふ。間が脱る。アイ。此大小か。ヲ、宜し。此竹杖に仕込置ましてござる。サア夫
 が定ならば抜て見せい。イヤ御覽するに及びませぬ。見せぬは彌偽り者め。試して仕舞ふ是へ出居らふと。地直と
 立寄鼻の先。繭と拔たる竹莖に。フシ皆々憫て見えにける。詞青竹下坂。二重切に生筒。エ、。ずんど能生
 ます。何れ。飯粘莖から御覽じませ。障子を張事毎何時を嫌ひませず。巻紙の纏様折敷の上の飯粘。下女下男の婢り
 能莖を遣ます。竹莖を遣ふに相違ござらぬ。了簡してお歸りやれ。ソレ。高市の役じやお客様如何じや。サア
 如何か。ア、間が脱る。私が云ふ。扱々大望有御方とも存せず。慮外の段眞平御免。先刀をお納なされと。地。扱
 扱すれば次郎右衛門。フシ刀を鞘に納ける。イヤハヤ我人知行頂戴すれば。待じやと存すれ共。武士の中にも御自
 分の様な有はある。近比侮が間敷けれ共。是に持合の金子寸志の御用に立たうござる。イヤ置あがれ。最前より

俱々に。馬鹿に成て戯話を盡すにそふらしいは竹光。何と由良殿。其元は主人小栗殿の敵。横山を討所存はないか。
 けもない事。城開渡す折柄。澳の長監に一學の首を渡す。又貴様が上へ對して。朝敵同然と立派な云分は尤。
 我等鯨返つて居た。甚戲氣の。所で仕廻は付ず。一學殿の首を轉つと渡して。其夜裏門から枯鹿。今此安樂な
 樂みするも。貴殿の仕方を學だお庇。昔の好は忘れぬ。コリヤ粹め。碎居れ。如何様此源四郎も。昔思へば
 建仁寺の古狸。化課せて今成。黒右と一所に此京に足を留め。青松葉で熏ても尾も出さぬは強か。強いは。コ
 イヤコレ由良殿。久し振のお盃。又頂戴と會所めくのか。角を離れて満圓盃。指居れ。吞は。吞居れ指
 は。丁と受るぞ。肴をするはと。地傍に有合ふ海老肴。フシ挾て直と指出せば。調ヲ、是は。腰伸して鬚戴くや年の
 暮。忝い。と。地喰んとする手を確と執へ。調コレ大岸由良之助殿。明日は主君小栗殿の御命日。取分速夜が
 大切と申すが。見事貴殿は其海老喰か。喰る共。但主人小栗殿が。海老にても成られたかな。エ、愚痴な人では
 有。此方や吾が浪人したは。判官殿の無分別から。スリヤ恨こそ有精進する氣微塵もない。御志の此海老で一舞舞
 ふ。謠海老は幼少より豎長。腰に梓の弓を張。目は出目出たかりける。ハ、ハ、ハ、ハ。地賞。酩酊致すと何氣なく。
 只一口に味あふ風情。邪智深き源四郎も。フシ憫て詞もなかりける。調イヤ。此肴では有ぬ。大座敷で
 洋鐘にしよ。歌吉野櫻は。日暮に門に立戸脊に立。如何潔さま人が。人が。チヨンガラカシヤシンゴロモ。七年前の。殿
 が見たさにヨイテイテイ。悪事仕なさんな。仕なさんなと云たらお前も腹立さんしよと私や思ひやす。皆々。フシ引連
 入にける。始終見届黒右衛門。調イヤコレ源四郎殿。様子満分と見届た。主の命日に精進もせぬ根性で。殊に彼芝居
 事の。非人敵討は何ぞ。大安寺の堤にて。返り討に合て寸段に切られた。次郎右衛門の役を由良之助が演るとは。ハ
 へ、ハ、ハ、ハ。此通主人横山殿へ申聞ば。帯紐解て寛然。成程最ふ御用心には及ばぬ事さ。コレサまだ爰に最前の。
 青井下坂刀の竹光。誠にコレ。大馬鹿者の證據は。差添迄も忘れて。コレ魂の脱。ドレ見分致そ。サツテモ

錆たり赤鯛。ハ、ハ、ハ、ハ。彌本心顯れた珍重。是より直横山殿へ注進貴殿は跡より。如何にも。跡より追
 追注進せん。去らば。おさらば。歌君は出て行木影で暫。磯の千鳥が来て招く招けど君が寄らばこそ思ひ切との鶏
 が鳴。それくく。左様じゃへ。奥よりフシ出る。お輕が姿。微醉機嫌の千鳥足。柳櫻に梅が香を。中居の龜が押
 直す。鏡に寫す夕化粧。フシ姫がしくも好もしき。詞手の鳴方へく。執まよく。由良鬼や未く。捉へて酒吞
 そ。く。ヲツト捉へたぞ。ア、コレ由良様何じやいや。ヤア迷子の兄やい。弟やい。ヲ、笑し。兄御様や弟御様
 を。尋さんすは。何事じやいな。問れて面目投島田。髪の薫て頭浮動。爰な輕の命取め。ア、コレ惡事。喧い生娘
 か何ぞの様に。逆縁ながら後堂より。抱奉る御本尊拜大事の知行の看板。大小を御存知ないか。ヲ、笑し。最前お
 前の非人敵討竹光の此刀。格と相住居の此脇指。扱は赤鯛と御覽じたか。ハテ扱面目次第も。内儀に何卒成氣はない
 かと。歌髪寄掛りし嫺竹の。節もフシ嫺嫺に見へにける。折しも胡亂く入来るは手錠を打れし髭奴。啞か吃かは知
 らね共只うんくと聲作り。指視て大岸が膝下近く突と寄。懷教へうんく。と。蟲が辭宜やら會釋やら。輕は見る
 よりコハ何者。賤しい奴のヲ、強。詞騒まい。氣遣ひな者ではない。此奴は此頃原郷右衛門方に抱し啞。使に來たか。
 ハテ能愼み。能來たく。サア爰へと。地仕形で招けば合點して。差寄て又懷を。フシ只うんくと計なり。詞ム
 ム懷に狀が有と云事か。手鎖を卸せし子細ぞ有ん。マア其狀をと懷へ。地手を入れて引出せば。狀箱ならて裸人形
 コリヤ何じや。ハテ異な物をと。矯つ透見つ由良の助。フシ小首傾け思案顔。詞夫は申し彼啞殿の持遊びか。外に文
 は有ざるやと。地懷攫せば。詞ヤレ輕見るに及ばぬ。謎を繋たる此使。コリヤ面白い悟て見よ。ム、先比郷右衛門
 に妾の事頼置しが。裸でも大事ないかと。裸人形を贈越たか。但又裸百貫出せと云所ではないか。地ハテ何哉
 と一思案。啞は身を揉卸されし手鎖を突付指付て。物は言れずうんく。で。フシ有無の分別は無しけり。地由良も急
 度心付。詞マア郷右方よりの使の啞。此人形の判斷物。判じ課せて返事せう。奴奥へ參れ。歌言ぬ愁氣を見る夢の。

何が戀やら情やら。移氣のなき床の海。跡見送つて。お輕は不審晴やらす。奥を眺て居る折柄。表に鑿々太鼓の音。
 此方も心得手拍子丁々。内へ這入は夜番の仁助。女共見へ男共省姿の頬被。娘々と呼聲に。咲と心て返事して。中
 戸口へ步出。詞囁様何の御用じや。コレ娘。此比此方は十日餘り。此扇九への居續故。顔も見たし幸と。表の番屋
 仁助殿の代役。呵はせぬか斷を。今日も云て給つたかや。ア、彼母様の入ぬお案じ。何日成共置ませう。代に太鼓に
 廻れと云。地悲しけれ共借賃と。思ふて給とフシ涙然。詞ヲ、彼人は又泣やるか公界の中に取交て與茂七殿迄世話に
 して。心遣て有ふ物其上に又此母まで大抵の辛苦じや有まい。兄の方からも定て文も來たて有る夫は左様と。揚詰の
 大盡は由良之助殿と聞。お主の敵討氣もなく。空氣じやの白痴大盡のと。云觸す其中へ。意見狀も來るとの噂。サイ
 ナ。御本妻のお石様とやらも山科へ來てござんすげな。ヲ、夫々。其本妻の手前も有。與茂七殿の心の内。嬉しうも
 有まい事。イヤ眞に忘れて居た。左專道の御供も爰にと指出し。地娘思ひや絆思ひフシ託涙ぞ親見なり。詞ア、コレ母
 様。疑ふて下さんすな。私や由良様の揚詰なれど。親方様が吞込なれば。一力でも此扇九でも。晝夜共に酒のお相手
 計じやはいな。ヲ、夫ならば由良之助殿は敵を討氣は。サア夫はどふも取ませぬ。私が吞込て居るはいなア。マア何
 か指置お前に頼事有。地コレ斯々と耳に口。包し帛紗フシ手に渡せば。關夫なら三條通の烏丸。野間屋久兵衛様の
 出店。預て有腹巻を。マア夫を卒度く。ヲツト合點じや。夫なら後に。歌儘にならぬが。浮世の癖か。眞に昔の神
 神様も何故に男は苛氣に仕にせて置た物じやいな。詞お輕様く。詞ヲ、與茂七様か。マア下に居やしやんと。
 地手洗の水に手を清め。詞コレ申し。是は大坂の左專道の不動様の御供。信心して上れや。如何に病なれば連八藤與
 茂七共云るゝ身の。現ないどふぞいな。爺御様の野邊送り。梅田堤の極樂橋で轉しやんした。彼橋で轉る人は。三年
 の内に死ると云が世の諺。命代と思へ共地妙藥お醫者は愚な事。何卒本氣に成んす様に。月々毎の七夜待。立待居
 待精進して。煙草斷やら。梅斷やら徒跣は八坂の庚申様。祇園清水鳥邊野の。日親様を頼やら。又一言寺の觀音様。

利生數多の其驗。折々本氣に見ゆる故。今母様を頼てな。お前の所持の胴丸を。受戻しに遣りました。責ては彼を見せたらば。本性にも成んしよかと。私や楽しんで居るはいな些は責て女房と。物言て下さんせ。やいの／＼と抱占ても。野澤の薄色吹雪。フシ夢に道。行風情なり。地斯る折節奥より出来る以前の啞ごる。合點の行ぬ眼光。使の様子子細ぞ有ん。窺ひ見んと此方成。屏風の陰に與茂七引連立忍び。フシ息を詰たる其中に。地兩手を縛られ彼曲者。一間の此方にゐて。奥の様子を窺ふ傍。直し置たる姿鏡に我身の影の寫るを見て。急度思案し憶かと座し。指たる脇差足首に。鏢元拔掛縛し兩手の縄切解。兩肌脱て直然と立。鏡に寫し背の文字を讀下せば。詞何々仰の通今宵何れも同道にて彼界より到来の鐵砲鐵砲洲へ同道仕り。アレにて汁の御趣向尤に候。我等醉醒しに御參會可申候。郷右衛門様御報由良之助より。地讀も勃々聞へる文章。輕は様子を満分と見届。下郎に似合ぬ其骨柄。擬は敵の犬成かと。有合脇指拔そばめ。窺居る。とは。地知ずして曲者は。奥を窺ふ指足拔足。既に切込其所を。付入女は忠義の念力。ぐつと突込弓手の助。疲ながらも強氣の曲者。女が賺引摺二三間投退れば。直然と立たるお輕が機轉。詞忍びの者を突留たり出合給へと呼はる聲。地奥へ聞へて由良之助刀提走り出。フシ手負を下に引すゆれば。地お輕は賢しくコレ申し。詞其奴は正しく敵の謀。奥の間へ切込故。八藤與茂七が女房お輕。地斯は計ひ候と。フシ甲斐／＼數も見へにけり。詞ヲ、出來した／＼。此奴敵の犬なりとは。原郷右衛門も悟りしにや。態と合點と召抱へ。我々身持の放埒を。彼めに内通致させなば。敵の油斷は味方の十分。今日使の裸人形。使を裸にして見よと。悟るに違はず背に一筆。今宵何れも傾國へ赴くとは通判の面々鎗倉へ打立との報知。我も追々打立用意。幸々彼めに我が放埒を。横山方へ注進をさせん爲。手鎖を脱し態と繩にて小手縛。彼めに文字を見せん爲。我が思ふ圖へ落入惡人。手に掛たるは八藤長七が嫡子。八藤與茂七則兼。空氣成共義士の連名。地血判せよと投出す一卷。現の與茂七直然と立。ハア有難し忝やと。辭する色なく血判確と押手元。輕は見るよりコリヤ本性か本氣かと。押廻し拾廻し。詞コレ女房輕じやが

見知てか。如何にもお輕覺て居る。ハツア夢ともなく現共不動の尊像。我胸中へ入よと思ひし時も時。由良之助殿の聲として。父長七が嫡子八藤與茂七。血判せよとの給ひしを。聞より心晴々と初日の出し心にて。本氣と成も不動の擁護。誠や會我的時宗も佛力にや叶ひけん。緣日廿八日に富士の狩屋へ忍び入。親の敵祐經を討取たり。我も不動の佛力と。お輕が日比の信心にて。忽本氣本性に。成たるも利雄の義心より。亡父迄も連判に加へ給はる御情。地へ、へ、有難し〜と。悦ぶ夫が本心を。お輕も俱に嬉しさは。天にも上る心地してフシ悦び合ぞ道理なる。利雄勇て重疊〜。詞是と云もお輕親子が貞節故。ホ、連賢女ナニ與茂七。門出の血祭急て止。地ハツト與茂七立掛り。扶し刀拔んとすれば。ヤレ暫くと今般の手負。起直つて息を繼。詞扱は郷右衛門にも貴方にも。傾城狂ひの放埒は。敵を計る拵事にて有けるよな。某全く敵の廻し者に非ず。小栗殿の家臣。早野七郎太夫が悴。同名勘平家次と云者。地と聞て大岸。詞扱は古傍輩の一子か。其身が又何故に。啞聲の贖者と成。郷右衛門や某を。調しは如何に〜。ヲ、御不審は御尤。某御主人の仇を報ぜん爲。先達て横山が館へ入込。命限りに働さしか共。討事は扱置。手引の爲に語合し。女房迄も其場にて敢ない最期。我は寺澤平右衛門が情にて。命辛々逃退し。地は何故ぞ貴殿達を恐れ。横山油斷せざる故。其恐るゝ程の功も有か。主君の仇を報ずる心も有かと。啞聲にと成て窺ひ見れば。詞郷右衛門も貴殿も。傾城狂に身持放埒。今日の使は密事と見へ。我が背に書遣はす。シヤ是こそ本心顯す文通と。鏡に寫し見る所に。矢張替らぬ傾城町へ出合の文章。亡君の恩も思はぬ知行盗人。横山よりは御邊を討が能追善。第一敵を討邪魔と。思ひ込だる初一念。近寄術の贖不具。地我は化たと思へ共。三十に足ぬ若狐。人を疑ふ心故尾に手の廻らぬ馬鹿狐。女童に暗々と突殺さるゝも運の盡。忠義厚き由良殿を疑ひし天の罰。則天の手を借てお輕の刃にて。斯大死も天の責。武運に盡し此勘平淺猿しや悲しやと。拳を握り牙を嚙。身を撞擣り五臓を揉。流るゝ血沙血の涙。大聲發て泣叫ぶは。フシ理責て苛しき。地始終を聞て由良之助。詞ヲ、驚入たる忠臣。親父七郎太夫殿は鎌倉詰。御邊は部屋

住故。面體見知らず疎忽の至り残念至極。實て最期の思出に。冥途の主君へ献上の。御土産を致さんと。地床の硯を引寄て連判狀取出し。詞希代の忠臣早野七郎太夫が一子。同苗勘平家次と。地巻頭に書記し。血判召れと指出せば。地今般の胸に勘平が。讀下して押戴き。ア、有難や忝や。詞我名計か父が名を記給へば。横山を討たも同然。未來の爲には能土産。血判致し申さんと。地流れし血汐を染付く。差出し。サア本望は達したり。詞由良之助殿去らば。何れもさらばと。地刀を我と逆手に持。エイうんく。と拔捨る。心の孝は厚けれど。薄き運命力なく。フシ終に果敢なく成にけり。地由良之助も與茂七も。可惜者残念と悲歎の涙に暮居たる。斯折節母妙三。息をも繼ず駈展り。詞コレく娘。受取て來た胴丸と。渡せば與茂七。詞ヤア是は我家の。サア夫は太坂の久兵衛様の志。扱は此方は本性に。成た共く。親子の衆の信心故。地ラ、嬉しやと妙三が。フシ悦ぶも又涙なる。地お輕は有にもあれぬ思ひ。勘平が拔捨し双物逆手に取直せば。コハ何故の自害ぞと。與茂七周章留れば。由良之助聲を掛。詞汝が兄の平右衛門足輕ながらも忠心厚く。鎌倉の義臣方へ。貢の金子は汝が貞節。其汝が今自害とは。心得難しと押留れば。地お輕は涙の顔を上。コハ有難き御詞。ケ程情も義も厚き利雄様の一味の内。一人にても千人成に忠心厚き勘平様は三十に成や成らずに死るのは嘸。口惜から無念に有ふ。其むだ死も私が業。是が生て居られふか。放して殺してくと。急促を押へて尤。詞其勘平への追善は。連判に加はりながら。敵一人も討取ず。未來て主君に言譯有まじ。其言譯はコリヤ爰にと地手を持添てぐつと突込非人小家。内には新道源四郎隅繕れ七頼八倒。夫引出せと下知の下。八藤與茂七立掛り。無二無三に引摺出し。詞ヤアコリヤ新道源四郎。臆病武士大侍。地好氣味と引立く。フシ庭へどつさと投付れば。地起しも立ず由良之介。暫擱んでぐつと引寄。詞獅子身中虫とは。汝が事。我君より高祿を戴き。大の御恩を着ながら。敵横山が犬と成て。ヨウ内通ひろいだなア。四十餘人の者共は親に別れ子を殺し。女房を君傾城の憂難難。思苦を凌ぐ此年月。地皆是亡君の仇を報じたさ。寢覺にも現にも。御切腹の御事を思ひ出して無念の涙。五臟六腑を絞

しぞや。詞取分今宵は殿の遠夜。口に諸の不淨を言ても。愼に愼を重ねる由良之助に。鰐魚肉を突付たなア。否とは言れぬ胸の苦しき。三代相恩のお主の遠夜に。咽を通した其時の心。何様に有ふと思ふ。五體も一同に憫亂し。四十の骨々も。碎る様に有たいやい。地エ、獄卒の魔王めと。土に捻付摺付切齒をなして居たりしが。詞ソレ與茂七。最前の某が竹光。主殺しの竹鋸。其指添の鑄刀。命を取ず苦痛をさして鬪殺し。地。畏つたと拔より早く。踊上り飛上り。切ども僅二三寸。明所もなしに疵一般。紆打廻つて。詞與茂七様。お輕様。詫して給と手を合せ。地以前は詞も掛ざりし。我より下の扶持人に。フシ三拜するぞ見苦しき。此地場で殺さば扇九が難儀。跡の言譯六か敷からん。館へ連よと羽織打着せ隠す内。詞申しく由良様申し。最ふお歸り遊ばすか。ホ、九左お梅。其葛籠は。ハツ此葛籠内は勘平。イヤ彼寒風御凌の夜の物。私が背負ふて瑞松院へ。ハア出来したと。地硯引寄。詞ソレ院主への送り狀。ハア。イヤコリヤ與茂七殿。喰醉た其客へ。加茂川で水難炊を喰はせい。ハア。行け。

九 冊 目 道 行 旅 緒 環

常陸帶。縁を結びし其國の。小栗の家も。フシ今は早。雪の花かや散逸に鳴子に騒ぐ群雀。己が羽風の烈しさも。横山嵐に襲れて。古郷を立か弓取の。名は彼岸に寄波も。世の柵や土川の。娘小娘が縁の糸。地結ぶ力彌を頼にて。母諸共に伊豆の郷先は山又山科に。有と計を開傳へとしや心も急がれて。日取も吉や旅立もよしや由有る武士の契は荷や變らじと。夫を便に思ひフシ立。心遣ぞやるせなき。然れば浮世の諺に。縁は異な物味な物。間近き時は添やらで遠ふ。成程逢たさをそふと言と粹な世は。フシ押て嫁入の。門出ぞと心で祝ふ三國の。富士の高根に。立烟。是も門火とフシ見返れば。雪の振袖鹿子の下着。解て逢夜を樂みに。我は秋鹿妻戀兼て。閨を隔てゝほろゝ打。イヨほろゝ打。夫は雉子の春の野邊。今は冬野のフシ淋しさも。末は夫に顔見せつ見もし見られん力草。旅は物憂や浮島

の兄弟持ぬ獨子が。願も叶へ三保の浦。千本の松の幾泊。おじやれくが呼聲に。歌田舎なれ共岡部は名所。都優りの女郎こざるく。月を待かの殿を待かの招く袂に文や玉章。ア、可笑へ。里は。島田か箆に夕邊の宿で櫛入て。今朝は見附の鈍髪。姫御前同士の用意迎。常も啼む延鏡。互に髻を搔撫て作る。所體を噴氣な風が。裾も。小棧も翻と。峰の風濱名の橋。世渡る業も三度笠。飛脚の足も空を行颯さ時雨の一曇漏じと翳す。袖笠臂笠。笠の端に降て通れば野も山も雲も地鯉鮒の冬景色。都も近く鳴海海宮の津に柁取て。アノ母様の後や先眞に桑名の氣抜ひ。ソレヨ其方も此母も旅の。始めの其上に。嫁入盛を引進て花を。飾ろと思ふから心に年も四日市戲ながら關越て。坂の下道行人の噂も相の土山と皆口々の辻占に頼て大津や三井の鐘。黃昏告る嬉しさに。心も足も急登る山科にこそ。三重、齊にけれ。

十冊目

地風雅でもなく。洒落てなく。詮方なしの山科に。由良之助が侘住居。祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し朝戻り。牽頭仲居に送られて酒が誘引る雪轉し雪は倒いて雪倒され。フシ仁體捨し遊びたり。詞旦那申旦那。お座敷の景能ござります。お庭の藁に雪持てとなつた所。頼と繪に描た通り氣疎じやないか喃お龜。サア此景を見て。外へは何方へも行たうはござりますまいかな。へツ朝夕に見ればこそ有住吉の。岸の向ひの淡路島山と云事知らぬか。自慢の庭でも内の酒は呑ぬく。エ、通らぬ奴く。サアく奥へく。地奥は何方にぞお客が有と。先に立て飛石の。詞も鈍路足取も鈍路に見ゆる酒機嫌。お戻りそふなと女房のお石が輕ふ汲て出る茶屋の茶よりも氣の端香。お寒からふと格氣せぬ詞の鹽。フシ茶醉醒し。地一口呑て跡打明。詞エ奥不粹なぞやく。折角面白ふ酔た酒醒せとは。ア、ア、降たる雪かな。詞如何に餘所の和郎達が嘸格氣とや見給ふらん。地夫雪は打綿に似て飛て中入となり。詞奥は嘸様と云ば咄と世帯衆といへり。地加賀の二布へお見舞の。詞遅いは御用捨。伊勢海老と盃。穴の稻荷の玉垣は。朱ふなければ

信が廻ると云様な物かい。ヲイこれ／＼。端返りじや足の大指折た／＼。おつと宜々。地序にかうじやと足先
 で。詞ア、是はたへさしやんすな嗜しやんせ。酒が過るとたはひがない。地眞に世話でござらふのとフシ物和我に
 待遇ふ。地力彌心得奥より立出。詞申し／＼。母人。親父様御寝なつたか。地是上られいと指出す親子が所作を塗分て
 も。下地は同じ桐枕。ヲ、ヲ、應は夢現。詞イヤ最う去やれ。ハイ／＼。左様ならば旦那宜敷う。地若旦那少
 御出を目遣てフシ去際悪う歸りける。地聲聞えぬ迄行過させ。由良之助枕を上。詞ヤア力彌。遊興に事寄丸めた此雪。
 所存有ての事じやが何と心得たぞ。ハツ雪と申す物は。降時には少の風にも散。軽い身でござりませう共。彼の如く
 一致して丸まつた時は。峯の吹雪に岩をも砕く大石同然。重いは忠義。其重い忠義を思ひ丸めた雪も。餘り日数を延
 過してはと思召ての。イヤ／＼。由良之助親子。原郷右衛門門外四十七人の人数はナ。皆主なしの日かげ者。日影にさ
 へ置ば解ぬ雪。急事はないと云事。爰は日當り奥の小庭へ入て置。螢を集め雪を積も。學者の心長き例。女共。切戸の
 内から明て遣や。地堺への状認めん。詞飛脚が來たらば報いよ。アイ／＼。地間の切戸の内。雪轉し込戸を立る櫛引
 閉フシ入にける。地人の心の奥深き山科の隠家を。尋て爰に來る人は。土川言藏行國が女房戸名額。道の案内の乗物
 を傍に待せ只一人。刀脇差指がげに。行儀亂さず。フシ庵の戸口。頼ませう地／＼と云聲に襷脱して飛で出る。昔の
 奏者今の。フシリんとうれと云も仕人成。詞ハツ大岸由良之助様お宅は是かな。左様ならば。土川言藏が女房となせて
 ござります。誠に其後は打絶ました。少お目に掛たい様子に付。遙々參りましたと。傳へられて下されと。地云入さ
 せて表の方。フシ乗物はへと早寄させ。地娘爰へと呼出せば。谷の戸明て鶯の梅見認たる微笑顔眉深に。被たる帽
 子の内。詞アノ力彌様のお屋敷はモウ爰かへ。地私や恥しいとフシ媚し。地取散す物片付て先お通成されませと。
 下女が傳へる口上に。詞駕の者皆歸れ。地御案内頼ますと。云も急々娘の小浪フシ母に。附添座に直れば。地お石悠
 然に出むかひ。詞是は／＼。お二方共能う御出。夙よりお目にも掛る筈。お聞及びの今の身の上。地お尋に預りお恥

しい。詞アノ改まつたお詞。お目に掛るは今日初なれど。先達て御子息力彌殿に。娘小浪を云號致したから。お前なり私なり地姫。同土御遠慮には及ばぬ事。詞是は痛入御挨拶殊に御用簾の言藏様の奥方。寒空と云思掛ない御上京。となせ様は兎も有小浪御寒。嘸都珍しからふ。祇園清水知恩院。大佛様御覽じたか。金閣寺拜見あらばコレ好傳が有ぞへと。地心置なき挨拶に只。咲々。地も口の内帽子羞明風情なり。地となせは行儀改めて。詞今日参る事餘の義に非ず。是なる娘小浪云號致して後。御主人小栗殿不慮の義に付。由良之助様力彌殿。御在所も定ならず。地移換る世の習替らぬは親心兎や角と聞合せ。詞此山科に御座有由承りました故。此方にも時分の娘早うお渡し申たさ。近比押付が間敷が。夫も参る筈なれど出仕に際のない身の上。此二腰は夫が魂。是を帯ば則夫言藏が名代と。私が役の二人前。由良之助様にも御意得まし。祝言させて落付たい。幸今日は日柄も吉。御用意成れてフシ下さりませと相述る。詞是は思ひも寄ぬ仰。折悪う夫由良之助は他行。去ながら。若宿に居ましてお目に掛申さふならば。御深切の段千萬忝う存じまする。云號致した時は。故殿様の御恩に預り。御知行頂戴致し罷在故。言藏様の娘御を貰ひませう。然らば呉ふと。云約束は申たれ共。只今は浪人。人遣迎もござらぬ内へ。如何に約束なれば迎。大身な土川殿の御息女。ホンノ世話に申す提燈に釣鐘。釣合ぬは不縁の元。ハテ結納を遣したと申すではなし。何方へ成と外々へ。御遠慮無ふ遣されませと。申さるゝてござりませうと。地聞て潑とは思ながら。詞アノまあお石様の仰しやる事。如何に卑下成れふ迎。言藏と由良之助様。身上が釣合ぬとな。夫ならば申しませふ。手前の主人は小身故。家老を勤る言藏は五百石。小栗殿は大名。御家老の由良之助様は千五百石。スリヤ言藏が知行とは。千石違ふを合點て云號は成れぬか。只今は御浪人。言藏が知行とは皆違ふてから五百石。イヤ其お詞違ひまする。五百石は擬置。一萬石違ふても。心と心が釣合ば。大身の娘ても嫁に娶まい物でもない。ム、是りや聞所お石様。心と心が釣合ぬと仰しやるは何等の心じやサア聞ふ。主人小栗判官様の御生害。御知慮とは云ながら。正直を元とする。お心より發し事。夫に引

横山に。金銀を以て媚諂ふ。追従武士の祿を取言藏殿と。二君に仕へぬ由良之助が大事の子に。地釣合ぬ女房は持されぬと。聞も敢ず膝立直し。詞詔ひ武士とは誰が事。様子に依ては聞捨られぬ其處を赦すが娘の可愛さ。夫に負るは女房の常。地祝言有ふが有まいが。云號有からは天下晴ての力彌が女房。詞ム、面白。女房ならば夫が去。力彌に代て此母が去た。く地と云放し。心隔の唐紙をフシ礮と。引立入にける。地娘はわつと泣出し。折角思ひ思はれて云號した力彌様に。逢せて遣ろとのお詞を便に思ふて來た物を。姑御の胸欲に。詞去れる覺は私しやない。母様どふぞ詫言して。地祝言させて下さりませと縋り敷けば母親は娘の顔を熟々と。打詠く。親の欲目か知ね共。眞に其方の容貌なら。十人並にも勝つた娘。能聲を故と詮議して云號した力彌殿。尋て來た甲斐もなう。聲に知さず去たとは。義理にも言れぬお石殿。姑去は心得ぬ。詞ム、く擬は浪人の身の所縁なう筋目を云立。有徳な町人の聲に成て。義理も法も忘れたな。ナフ小浪。今云通の男の性根。去たと云を面當欲がる所は山々。外へ蟻入する氣はないか。コレ。大事の所泣ず共確然と返事仕や。コレ如何じや。く地と。尋る親の氣は張弓。アノ母様の胸欲な事仰しやります。國を出る折父様の仰しやつたは。浪人しても大岸力彌。行儀と云器量と云。仕合な聲を取た。貞女兩夫に見えず。醫夫に別れても又の夫を設なよ。主有る女の不義同前。必々寢覺にも殿御大事を忘るゝな。由良之助夫婦の衆へ。孝行盡し夫婦中。睦い迪何分にも。格氣ばしして。フシさるゝな。地案ぜふか迪隠さずと懷に成たら早速に。報せて吳と仰しやつたを。詞私しや能覺て居る。地去れて行て父様に苦に苦を掛て何様云て如何云譯が有共。力彌様より外に餘の殿御。私しや否。々と一筋にフシ戀を立ぬく心根を。地聞に堪兼母親の。涙一途に突詰し。覺悟の刀拔放せば。母様は何事と。押留られて顔を上。詞何事とは曲がない。今も其方が言通。一時も早う祝言させ。初孫の顔見たいと。娘に甜寵は爺の習ひ。地悦んでござる中へ未だ祝言もせぬ先に。去れて戻ました迪如何通て行れふぞ。と云て先方に合點せにや。フシ仕様模様もないわいの。地殊に其方は先妻の子。私とはなさぬ中じや故。およ

そにしたかと思はれては。何分生ては居られぬ義理。此通を死だ跡で爺御へ云譯して給や。詞アノ勿體ない事仰しや
 ります。殿御に嫌はれ私こそ死べき筈。地生てお世話に成上に苦を見せます不孝者。母様の手に掛けて私を殺して下
 さりませ。去れても殿御の内爰で死れば本望じや。早う殺して下さりませ。詞ヲツツ能言やつた出来しやつた。其
 方計殺しはせぬ。此母も三途の供。其方を吾が手に掛けて。母も追付跡から行。地覺悟は能かと立派にもフシ涙止て立
 掛り。詞コレ小浪。アレあれを聞や。表に虚無僧の尺八。鶴の集體。地鳥類でさへ子を思ふに科もない子を手に掛る
 は。因果と因果の寄合と。思へば足も立兼て。震ふ拳を漸に。振上る刀の下。尋常に座をしめ手を合せ。詞南無阿
 彌陀佛と。地唱ふる中より。御無用と。聲掛られて思はずも。鈍し拳尺八もフシ俱に閑然と靜りしが。詞ヲ、左様じ
 や。今御無用と留たは。虚無僧の尺八よな。助たいが山々で。無用と云ふに氣後し。未練なと笑はれな。娘覺悟は宜
 かやと。地又振上る又吹出す。機會の拍子に又御無用。詞御無用と止たは。修行者の手の内か。振上た此手の内
 か。イヤお刀の手の内御無用。勲力彌に祝言させふ。エ、然ふ云聲はお石様。夫りや眞實か誠かと。地尋る襖の内
 よりも。相に相生の。松こそ目出度かりけれと。地祝義の小謠白木の小四方フシ目八分に携出。詞義理ある中の一
 人娘。殺さふと迄思ひ詰た戸名瀬様の心底。小浪殿の貞女。志が最愛させにくい祝言さす。其代世の常ならぬ嫁の
 盃。請取はコレ此三方。地御用意有ばと指置ば。地少は心休まりて拔たる刀鞘に納め。詞尋常ならぬ盃とは引出物
 の御所望ならん。此二腰は夫が重代。刀は正宗。指添は浪の平行安。家にも身にも代ぬ重寶。是を引出と皆まで言さ
 ず。詞ヤア浪人と侮つて。價の高い二腰。まさかの時賣拂へと云ぬ計の掣引出。御所望申すは是ては無い。ム、夫な
 ら何が御所望ぞ。コレ此三方へは土川言藏殿の。お首を乗て貰ひたい。エ、夫りや又何故な。御主人小栗判官様。
 横山郡司にお恨有て。鎌倉殿で一刀に切掛給ふ其時貴方夫土川言藏。其座に在て抱留。殿を支た計に御本望も遂ら
 れず。敵は漸く薄手計。殿はやみ／＼御切腹。口へこそ出し給はね。其時の御無念は。言藏殿に憎しみが。保るまい

か有まいか。家來の身として其土川が娘。安閑と女房に持様な力彌じやと。思ふての祝言ならば。コレ此三方へ言藏殿の白髮首。否と有ば何方でも。首を並ぶる尉と姥。夫見た上で盃させふ。サ。サア。否か。應かの返答をと。尖詞の理屈詰。親子は潑と差伏向途方にくれし折柄に。詞土川言藏が首進上申す。お受取成れよと。地表に控し無僧の。笠脱捨て徐々と内へ這入ば。地ヤアお前は父様。言藏様地爰へは如何して此形は。合點が行ぬ是りや如何じやと咎る女房。詞ヤア騒々と見苦しい。始終の様子は皆聞た。其方達に知さず爰へ來た様子は追て。先黙止。其元が由良之助殿御内證お右殿よな。今日の仕宜斯有んと思ひ。妻子にも知せず。様子を窺ふ土川言藏。案に違はず拙者が首。筆引出に欲いとな。ハ、ハ、ハ、ハ。否早其りや侍の言事さ。主人の仇を報はんと云所存もなぐ。遊興に耽り。大酒に性根を亂し。放持なる身持。日本一の白痴の鏡。蛙の子は蛙に成はい。親に劣らぬアノ力彌めが大白痴。狼狽武士の生鈍まがね。此言藏が首は切ぬ。馬鹿盡すなと踏碎く。地破三方の縁放れ。此方から鞆に取ぬ一寸才な女めと。言せも果す。詞ヤア過言なぞ言藏殿。浪人の鐙刀切るか切ぬか鹽梅見せふ。不祥ながら由良之助が女房。望む相手じやサア勝負。地勝負くゝと裾引上。長押に掛たる鐙追取。突掛らんず其氣色。是は短慮なマア待てと。止隔つる女房娘。詞邪魔ひろぐなとあらけなく。右と左へ引退る。間もあらせず突掛る。鐙の沙首引攔。捫て拂へば身を背け。諸足縫んと閃す。刃背を蹴て蹴上れば。拳放れて取落す。地鐙奪はれじと走寄腰際際際引攔。撞と打付動かせず。陸に引敷強氣の言藏。敷れてお石が無念の切齒。親子はヘア／＼フシ危む中へ。地駈出る大岸力彌。捨たる鐙を執手も見せず言藏が。右手の肋。左手へ通れと突通す。吁と計に岸波と伏。コハ情なやと母娘取付。歎くに目も掛ず。止刺んと取直す。詞ヤア待て力彌早まるなと。地鐙引留て由良之助手負に向ひ。詞一別以來珍敷言藏殿。御計略の念願届き。聲力彌が手に掛つて。嘸本望でござらふのと。地星をさいたる大岸が。詞に言藏目を見開き。詞主人の體憤を晴さんと此程の心遣ひ。遊所の出合に氣を弛ませ。徒黨の人数は揃つらん。思へば貴殿の身の上は。此言藏が身に有べき管。

去年の春伊豆の牧符の折柄。主人結城六郎。横山郡司に恥しめられ。以ての外憤り。某を密に召れ。先斯々の物語
 明日御殿にて出會。一刀に討留ると。思詰たる御顔色。地留ても留らぬ若氣の短慮。詞小身故に横山に。賄賂薄きを
 根に持て。恥しめたと知たる故。主人に知らせず。不相應の金銀衣服臺の物。横山へ持参して。心に染ぬ。諂も。主
 人を大事と存るから。賄賂負せ彼方から誤つて出た故に。切に切れぬ拍子拔。主人が恨も斷然と晴。地相手代て小栗
 殿の。難義と成たは則其日。詞相手死すば。切腹にも及ぶまじと。抱留たは。思ひ過した言藏が。地一生の誤りは娘
 が難義と白髪此首。聲殿に進ぜたさ。詞女房娘を先へ登し。媚諂らひしを身の科にお暇を願ふてな。道を換て其
 方達より二日前に京着。若い折の遊藝が役に立た四日の内。貴方の所存を見拔た言藏。手に掛れば恨を晴。約束の
 通此娘。地力彌に添せて下さらば未來永劫御恩は忘ぬ。コレ手を合して頼入。忠義に成ては捨ぬ命。子故に捨る親
 心。推量有由良殿と云も涙に咽返れば。妻や娘は有にもあられず。眞に斯とは露知らず死おくれた計りに。お命捨る
 は餘りな冥加の程が恐ろしい赦して下され父上と岸波と。伏て泣叫ぶ。親子が心思ひやり。大岸親子三人も。フシ俱
 に落れて居たりしが。地ヤア。言藏殿。詞君子は其罪を憎んで其人を憎まずと云ば。縁は縁。恨は恨と。格別の沙
 汰も有べきにと嘸恨に思はれんか。所詮此世を去人。底意を明して見せ申さんと。地未前を察して奥庭の障子颯然と
 引明れば。雪を搏て石塔の。五輪の形を二つ迄。造立しは大岸が。フシ成行果を顯せり。地戸無頼は賢く。詞ム、御
 主人の仇を討て後。二君に仕へず消ると云お心の彼の雪。力彌殿も其心で娘を去たの胸欲は。御不便餘てお石様。恨
 んだが私しや悲しい。エ、戸無頼様の仰しやる事はいの。玉椿の八千代迄とも祝はれず。後家に成嫁取た。地此様な
 目出度悲しい事フシはない。詞斯云事が忌に。苛う酷ふ言たのが。嘸憎かつたてござんしよなふ。イ、エイナ私こ
 そ腹立ま。町人の聲に成て。義理も法も忘れたかと云ふたのが。恥しいやら悲しいやら。何方も顔が上られぬお石様。
 となせ様。氏も器量も勝た子。地何として此様に。果報拙い生れやとフシ聲も。涙に堰上る。地言藏熱き涙を押へ。ハ

ツア、嬉しや本望や。吳王を諫て誅せられ。辱めを笑ひし吳子胥が忠義は取に足ず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓。日本の大岸。昔より今に至る迄。唐と日本に只た二人。地其一人を親に持。力彌が妻に成たるは。女御更衣に備るより。百倍勝つて其方が身は武士の娘の手柄者。手柄な娘が聲殿へお引の目録進上と懷中より取出す。力彌取て押戴き披き見ればコハ如何に。目録ならぬ横山が屋敷の案内一々に。玄關長屋。侍部屋。水門物置柴部屋迄繪圖に委しく書付たり。由良の助呼と押戴き。詞へエ有難し。徒黨の人数は揃へ共。敵地の案内知れざる故發足も延引せり。此繪圖こそは孫吳が秘書。我爲の六韜三略。地兼て夜討と定めたれば綱梯子にて塀を越忍入には縁側の。雨戸外せば直に居間。爰を仕切て斯責てとフシ親子が悦び。地手負ながらも不疎言藏イヤ。夫は僻言ならん。詞用心嚴敷横山郡司。障子襖は皆尻鎖。雨戸に合栓合樞。抉ては外れず重槌にて。壞ば音して用意せんか。ソレ如何。地ヲ、夫にこそ術有れ。詞擬ては思案に能はずと遊所よりの歸途。思ひ寄たる前栽の雪持竹。雨戸を外す我工夫。地仕様を爰にて見せ申さんと。庭に折しも雪深く。斯程に強き大竹も雪の重量に。軟弱と斜垂竹を。引廻して鴨居に簀。雪に撓は弓同然。詞此如く弓を拵弦を張。鴨居と數居に簀置て。一度に切て放つ時は。地眞此様にと積たる。枝打拂へば雪散て。伸るは直なる竹の力。鴨居撓んで溝外れ。障子残らず撥々。言藏苦しさ打忘れへ、ア仕たり。詞計略と云義心と云。斯程の家來を持たながら。了簡も有べきに。地淺きたくみの小栗殿。口惜き振舞やと。悔を聞に御主人の御短慮成御仕業。今の忠義を戦場の御馬前にて盡さばと。思へば無念に閉塞る。胸は七重の門の戸を洩るは涙計なり。地力彌は徐々下立て父が前に手をつかへ。詞言藏殿の寸志に由り。敵地の案内知たる上は。泉州堺の天川屋義平方へも通達し。荷物の上面仕らんと聞も敢ず何さ。山科に在る事隠なき由良の助。人数集めは人目あり。一先堺へ下つて後。彼邊から直に發足せん。其方は母嫁。戸無瀬諸共に。跡の片付諸事萬事何も斯も。心残りのなき様に。ナ。ナ。コリヤ。地明日の夜船に下るべし。我は幸言藏殿の忍び姿を我姿と。袈裟打掛て編笠に。恩を戴く報謝返し未來の迷ひ晴さ

ん爲。詞今宵一夜は嫁御寮へ。舅が情の。地獄流し。歌口占して立出れば。兼て覺悟のお石が歎き。御本望と計にて。名残惜さの山々をフシ言ぬ。心の苛しき。地手負は今を知死期時。父様申し父様と呼ど。答ぬ斷末魔。親子の縁も玉の緒も切て一世の。フシ憂別れ時と泣母泣娘。俱に死骸に向ひ地の。回向念佛は戀無常。出行足も立留り。六字の御名を笛の音に。詞南無阿彌陀佛。地南無陀彌陀。是や尺八煩惱の。枕並ぶる追善供養。閻の契は一節切。心残して 三重出て行。

十一 冊目

地横山郡司信久が桐が谷の館には。廻に高堀掛並べ夜廻りの聲柝の。隙間も有ぬ要害に。癖の害の歡樂は。フシ運の末とぞ聞えける。既にフシ其夜も。子の刻過。小栗判官兼氏の家臣大岸由良之助。親子が忠誠是を守つて一味の勇士四十餘人。義を金鐵より堅くして命は泉下の君に投打ち。死を一戦に思ひ立たる出立は兜頭巾に眉深み。面々背中に金の短冊。姓名を書記し。得物の道具を横ゆれば。地中にも堀江彌五郎は由良之助が智勇に依て。八尺計の大竹に弦を掛たる大弓を。四五挺計振擔げ勇にいさみ横山がフシ門外近く押寄たり。同じフシ出立に向ふより。進來るは郷右衛門。透見るより由良之助。詞ヤア郷右殿。今晝寺澤が親知に依て。今宵茶の湯振廻の跡へ討入申さんと。斯迄は攻寄しが時こそ宜れ。アレ御覽ぜ。人靜つて情氣沈み。殺氣上に覆へり。破軍も異に向ひし故。小野寺惣内を頭として。若殿原を相添。搦手へ廻したり。此手は某親子を始各共に討入合點。夜討の大事は奇正の變。敵を明りに牽制出し。味方はくらみを小楯に取。女童に手な負せ。鎌倉を恐るゝ敵討。火の用心に心を付て繫馬を放さすな。折々に相圖の笛。地吹合。詞敵に中を割るゝな。天川氏にて約せし如く。地合詞を常として味方討すな同士討すな。詞相詞も三度に替り。乘込時は山か鐘。軍に成ては。花か海。退時は川か月。向ふ者は討て捨。逃る敵を追駈て罪作に際取るな。取べき首は只一個進にも退にも。味方の印を本にせよ。地用意が能ば攻寄よと。手組を拵しとく。

しとくくくと詰寄て。時分は宜と大鷲傳五。郷右衛門が肩先踏へ堀のフシ上に跳上り雪の明りにフシ篤と見濟し。地表門の貫の木にも内より錠を固た。詞かけ矢くと呼立れば。地まつかせと味方の若者。かけ槌を提立向ふ。折こそあれまだ用心の内なれば山形兵衛夜廻役。拆の音幾々フシ打て通れば。地是幸と大鷲傳五翻然と。内へ飛込機會。兵衛が正面眞二つ切捨く。直に拆追取て遽けに。内より打ば外よりも音に合して丁々々。門中より正斷と折扉微塵に打碎かれフシ大門颯とぞ開ける。地由良之助一番に踊入。竊に松明指上て内の様子を見廻く。山と一聲掛ければ。鐘と答へて一同に我もくと。込入しが。フシ詰りくは。戸を閉たり。鄭劇は目を覺し。敵に先を取れんと。兼て期したる謀大鷲傳五郷右衛門。大竹の弓四五挺戸口の敷居鴨居。確と喰ませ手を揃へ。弓弦を一度に切放せば。鴨居を四五寸持上られ。遣戸妻戸は班々とフシ將基倒と成にけり。地大岸親子透間もなく。縁の上へ跼上り。勢込ふて大鷲發。同小栗判官兼氏が家臣大岸由良の介利雄。同苗力彌利金。此外忠義の武士四十餘人。亡君の怨を報ぜん爲押寄。横山殿の御首給らんと呼はつて。地數多の勢を引從へ一文字に切入ば。頃哉夜討と混亂し宵の茶の湯の茶筌髪。寢悦顔に素肌武者フシ太刀上鎌よと聞いたり。地小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者秘術を盡せば由良之助。調外の者に目な掛を。只横山を討取と。地八方に下知をなし揉立く。三重戦ふたり。地北隣は佐々木時綱。南隣は石堂右馬之丞。兩屋敷より何事かと家根の棟に武士を上フシ提燈星の如くにて。調御屋敷騒しく候は。狼藉者か盜賊か。但し非常の沙汰に候か。子細如何にと尋れば。地大鷲傳五郷右衛門左右に別れて詞を揃へ。調是は小栗判官兼氏が家來。主君の仇を報ぜん爲切入て候。鎌倉へ對する狼藉にても候はず。固より御兩家へ對し。何の遺恨も候はねば。卒爾致さん様もなし。火の用心堅く申付候へば。只穩便に拾置れ候へ。夫共是非御加勢と候へば。力なく一矢仕らんと高聲に申にぞ。地兩家の人々是を聞。詞神妙く。弓矢取身は相互。我人主人持たる身は尤斯こそ有べけれ。地御用有ば承らんと。鳴を鎮てフシ入にけり。此方の館は大勢が一時餘りの戦ひに。手負は僅三三人。由良之助相

圖の笛吹立く味方の勢。一所に集て如何に方々。詞横山が寢所を見届しに。夜着蒲團を引散し此寒夜に冷もせず。蒲團の上の暖さ。脱出しに間も有まじ。アノ水門の箱櫃こそ心悪し。内より水を流し掛外へ廻つて窺ひ見よ。心得たりと八藤與茂七大岸力彌。郷右衛門諸共に外へ廻つてフシ待掛る大鷲傳五内よりも用水を滔々と。汲入く流せ共水口別れて滴りの。跡へ餘つて落口はフシ岩に堰るゝ如くなり。詞人有るに極つたり。鏝を入れて捜せやと。地各自に突立狩立れば。堪兼てめつと出る。眞黒黒塚黒右衛門。泊合せて此仕合せ。ノウフシお助と這廻る。地大岸力彌走寄。詞先比祇園町の騒の折柄。源四郎と心を合せて注進したる大侍。地横山が先驅せいと。首討落せば紅の。フシ血汐の樋とぞ流れる。地由良の介は切齒をなし。詞是程迄に仕課せて。横山を討洩せしは。地能く運命に盡果しと拳を握り無念の涙。有合人々を惘果餘の事に詞なく鎮り。返つて居たりける。地夜は沈々と更渡る庭の木立も雪折て雪風寒く身も凍へ。壁と壁との其間に。隠忍びし横山が次第く冷凍へ哮と一息聞ゆれば。地利雄は沸と邊を見廻し。詞今吐息は郷右衛門か。力彌か。イヤ傳五か平右か。地此邊にて。如何にも。此由良の介が坐し邊ア、ラ不思議や。地此壁の内呼吸の通ふは何にもせよ。誰ぞ鏝を入れよと。地詞の中力彌傳五兩方よりぐつと突込鏝先に。詞てこたへしたぞまつかせと。地各自に毀壁の内七顛八倒横山が。突通されし鏝玉に。人々勇の聲を上。小栗の近臣四十餘人主君の怨目比の本望。盲龜の浮木優曇華の花も無念も開けしと。九寸五分にてフシ首掻落し。地由良之助扇を開き舞諷ふ。悦びの聲聞の聲。和哥に和らぐ竹の葉の。其節々は幾八千代納る御代こそ目出度けれ。

明和元甲申年閏臘月十五日

者作

黑 藏 主
中 邑 阿 契

いろは歌義臣終